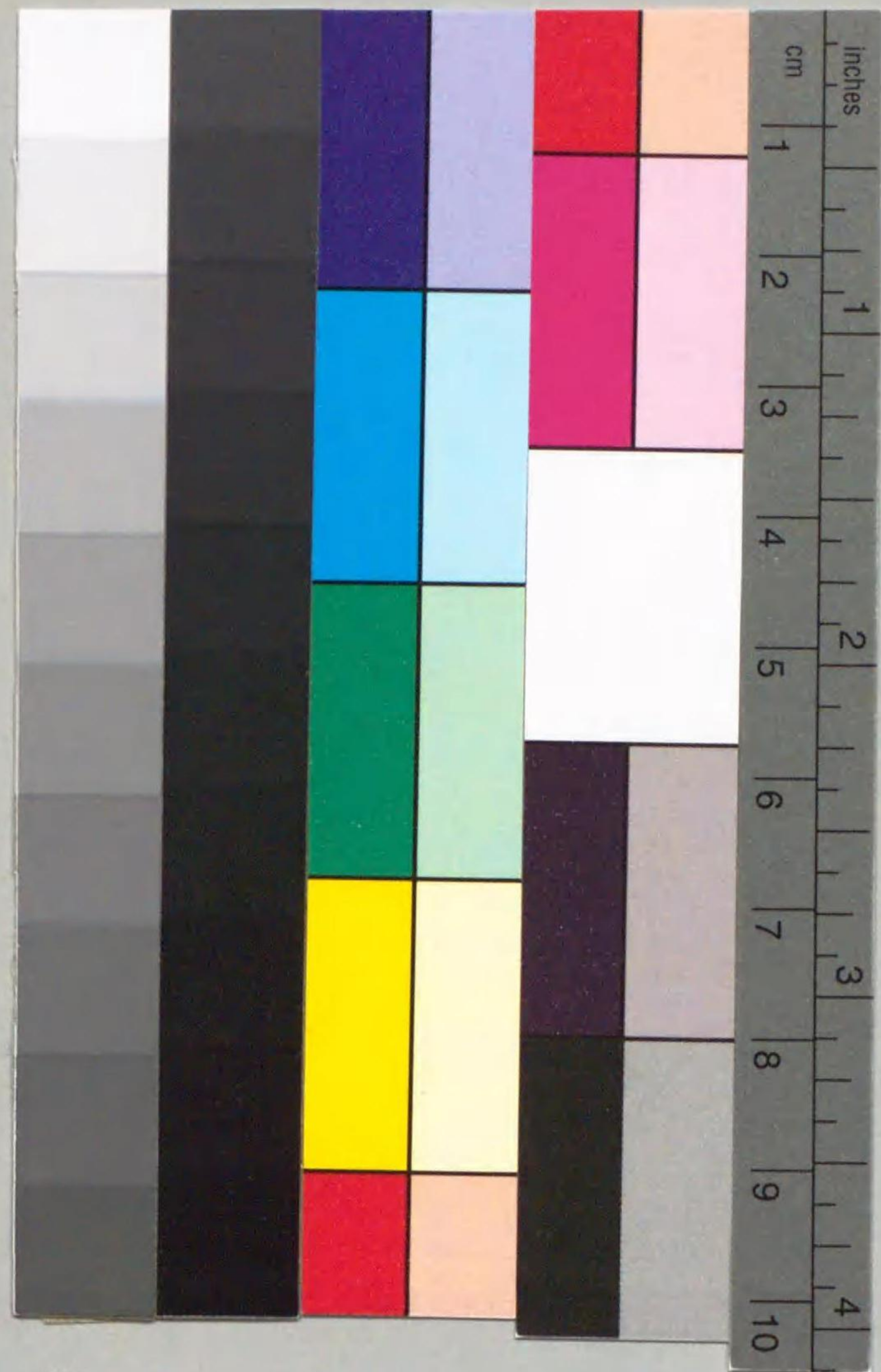


學級文庫
支那の童話

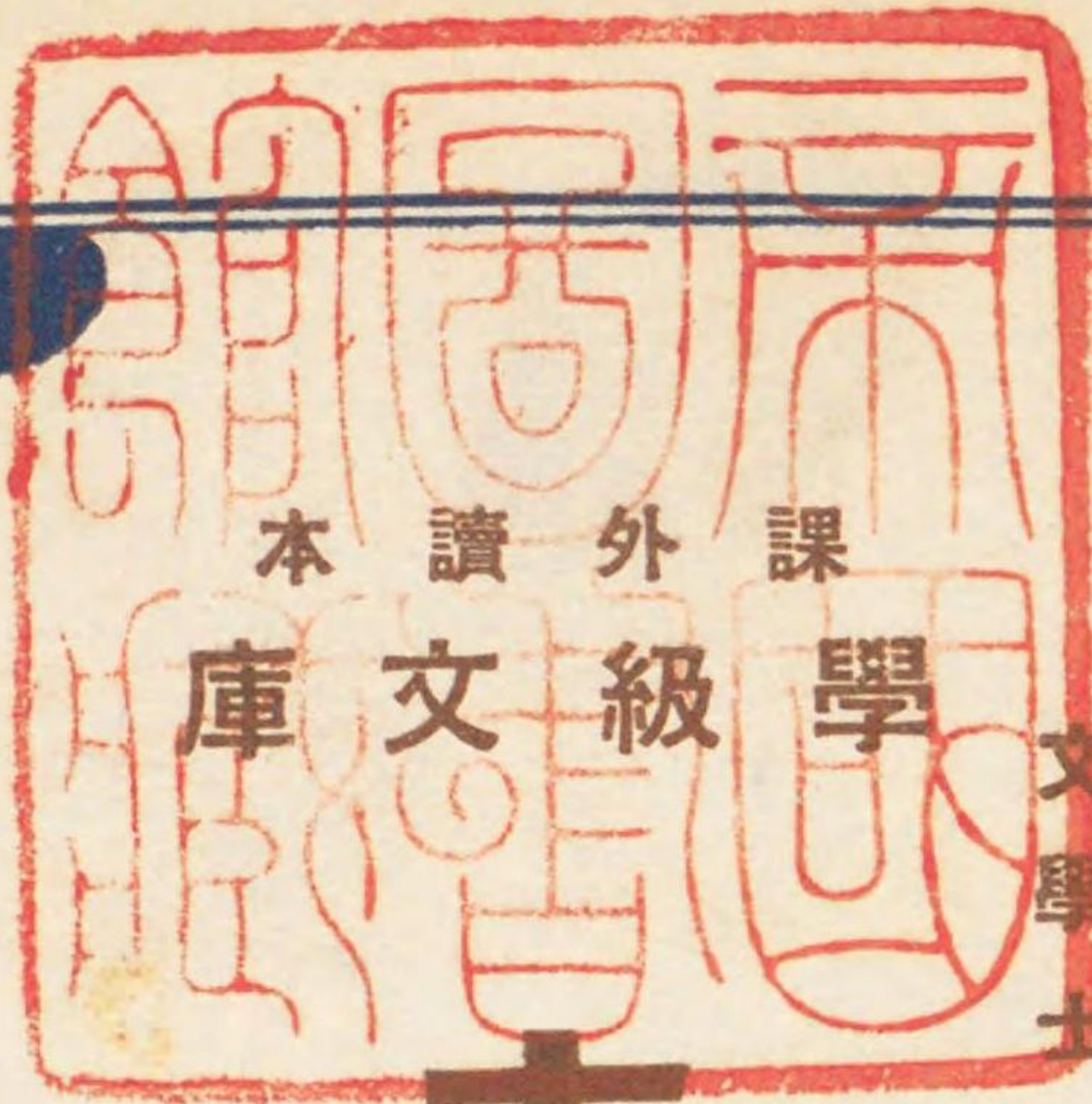
313
620



ヨネウシ社



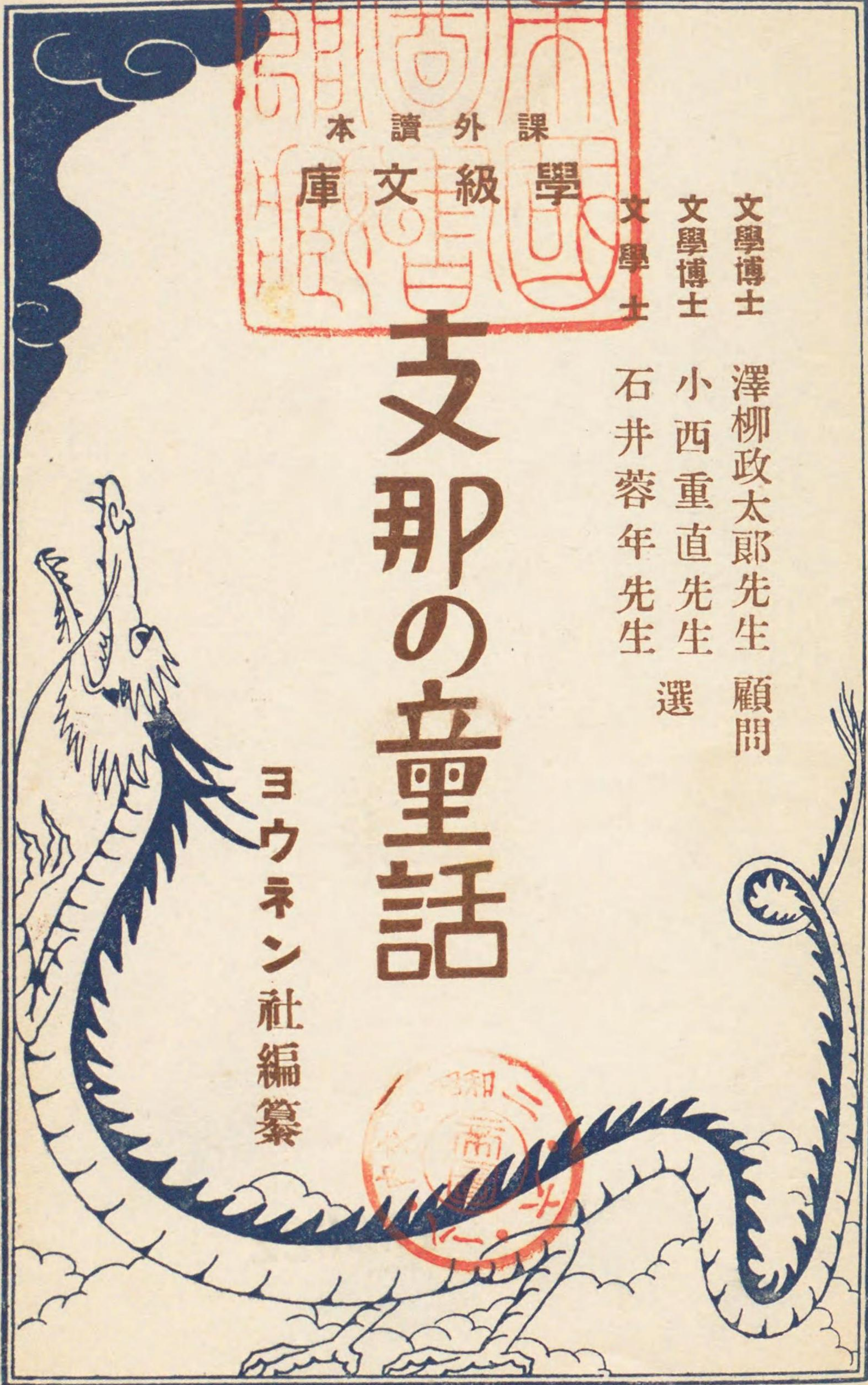




文學博士 澤柳政太郎先生 顧問
 文學博士 小西重直先生 選
 文學士 石井蓉年先生

支那の童話

ヨウネン社編纂



27
I-1



文學士 百井蓉平 撰
文學士 小西重直 校
文學士 宇野浩二 監

支那の童話

百井蓉平 撰

150622





支那の童話目次

衛周祚と小人	魔法較べ	石の裁判	黒牛の皮	天上の桃	學者と弟子の夢	幽霊を賣つた話	三娘子出よ	千日酔ふ酒	不思議な石馬
.....
六	七五	六一	五〇	三九	三一	二六	一八	二三	一



古戦場の夜……………九四

馬鹿の老韓さん……………一〇一

旋風に攫はれた少女……………一二

蠟燭のない國……………二〇

人間の皮……………二三

李丘から李孝へ……………一四

魔法のマント……………一五〇

占ひの名人……………一五五

幻術使ひの仇討……………一六七

幽霊塔の秘密……………一八〇

目次終り

支那の童話

ヨウネン社編纂

不思議な石馬

ある田舎の百姓家に毎日學校に通つてゐる九つになる男の子がゐました。同じ學校に通つてゐる他所の子供等はいつも明るい間に歸つて來るのに、その子供だけは、いつもいつも往きかふ人の顔も判然解らない日暮れ方でないと歸つて來ませんでした。

その子供にはお父さんしかありませんでした。お父さんは家が貧しいので、朝から晩まで外へ出てせつせと稼がなければなりません。それでさうした子供のこ

不思議な石馬



とには一向氣が附きませんでした。

いや、むしろ、子供は毎日、おとなしく、勉強してゐることと許り思つてゐました。

ところが、ある日、引き続き子供の歸りの遅いのに氣附いて、

『お前は、何うしてかう歸りが遅いんだい……』

お父さんはかう叱るやうに云ひました。が子供はボンヤリとして黙つてゐるのでした。

その次の日も、次の日ももうお父さんが野良から歸つて、暗いお臺所で、疲れた體でこそく夕食の仕度をしてゐる時分、ひよつこりと歸つて來るではありませんか。

『お前は何うしたんだい……昨日も、一昨日もあれ程云つて聞かせたのに……』
お父さんがかう云つても、子供は矢つ張り黙つてゐました。お父さんはたうと

うぶりぶり怒り出して、

『黙つてゐては解らないぢやないか……』
『そんなことなら、もう學校へは上げないよ、お父さんと一緒に、野良で働け！
御本なんか讀んだつて、親の呟けが守れないやうな子供は仕方がない……』

お父さんは前よりも烈く叱りましたが

『……………』

子供は相變らず黙り込んで俯向いてゐるばかりでした。

お父さんはすつかり腹を立て、了つて、もうもうこんなことなら、いつそ子供を學校から下げて了はうとさへ思ひました。貧しいお父さんは、實は學校のことなんか、餘り大切とは考へない人でした。それよりか、一人でも稼ぎ手の殖える方がいゝとさへ思つて居たのです。

でも、流石に子供の可愛さに惹かれて、お父さんは別に學校も下げもしない



でその儘にして置きました。が、子供の歸りは相變らず遅いのでした。ある日お父さんはこれはいつまでも放擲つては置けないと思つて、學校の先生の所へ訊きにゆきました。

「若しかしたら、學校の方で、毎日歸りが遅れるやうなことがあるのかもしれない……」

途々歩きながら、かうも思つてみました。

「否、々、學校の引けるのは、きつかり二時です……、何うして、そんなに遅れるわけは有りません……」

學校の先生は案外と言ふ様な調子でかう申しました。

「はてなあ……、何をしてるのだらう……。若し不良少年の仲間入りでもして、何か悪いことでもしてゐるのでは有るまいか……」

お父さんはかう思つて、人知れず、心の中で氣を揉みました。



「全く、あの生徒は、何うしたといふんだろ……。それとも、途中で道草を喰つてるのかな……」

先生はお父さんが心の中で思つてるやうなことを重ねて申しました。

「まつたくさうでもなければ、あんなに遅く歸へるつて譯がありません……」

「それにしても、毎日遅くなるといふことが不思議だ……」

お父さんと先生は、二人で暫く思案に暮れました。が、お父さんは働きに往かなければならぬので、そこから野良の方へ出てゆきました。

その後姿を見送つた先生は、

「今日、授業が了つたら、そつとあの子供の後をつけて往つてみよう、さうすれば譯が解るだらう……」

かう思ひました。

「先生、左様なら……」

『先生、左様なら……』

学校の退け刻が來ますと、列を作つた子供達は、嬉しそうに口口にかう云つていそ／＼と校門を出て往きました。

先生はいつもなら、にこにこしながら、それ等の子供達を見送るのでしたが、今日は、心配さうにして、或る列の中にあるその不思議な子供の様子を注意深く見てゐました。

その子供は、何處か沈んだやうな様子で、相變らず黙つて校門を出てゆきました。

『さあ、見失つては大變だ……』

先生は帽子を冠ぶるが早いか、づか／＼と駆け出して、見え隠れにその子供の後を追つてゆきました。

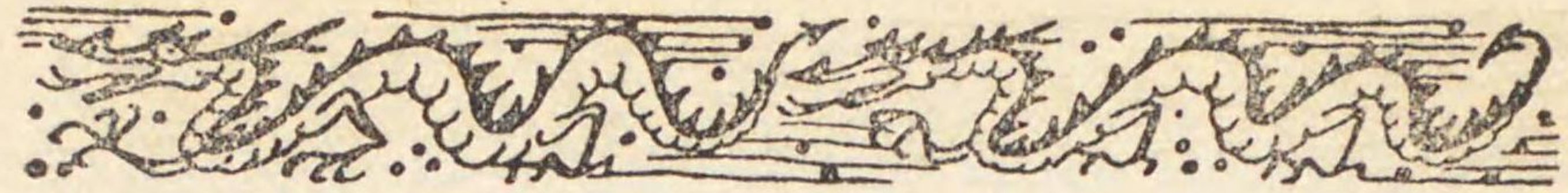
『先生、今日は……』

通りすがりの町の人々が、かう云つて先生に聲をかけても、先生の耳には這入りませんでした。只、子供の後姿を見失ふまいとちつと一所を見つめて先生は往き過ぎました。町の人達は平生に變つた先生の様子を怪しみながら先生を見送りました。

町の小さい道を幾曲りかしてゐる裡に、もう可なり離れた田舎道にかゝつてゐました。遙か向うにせつせと歩いて行く子供の姿が、黄ろい砂地に黒點を打つたやうに見えました。

學校のある町から、可なり道程のある或る小山の麓までやつて來ました。先生はちよと變な氣持になりました。まるで。夢の國を歩いてゐるやうで、一里四方位の小さい村を子供の歸へるのを後を附けて歩るゐるとは何うしても想はれませんでした。

狐にでも騙されてるのではないかと、眼蓋をばち／＼させながら、向うの方を



注意してみました、別に變つたことはありません。

子供は、相變らず平氣ですたゞ歩いてゐました。

すると、丁度その時子供は小山に登りかゝりました。

『オヤ變だな……』

子供の家がこの邊でないことを知つてゐた先生は、不思議に思ひながら、木蔭にかくれて見てゐました。

子供は、次第に爪先上りに登つて行きました。そこにはいろ／＼の形をした墓標が立ち並んでゐる一段歩ばかりの墓地がありました。

子供は、そこまで來ると、つと立ち止まり其傍に在る石地藏に自分の掛けてゐた鞆を外すや、そつと渡すやうな風をしました。

すると、何うでせう、石地藏が全るで人間か何ぞのやうに、兩手をそつと出して、鞆を受け取るや、恭しくそれを兩手で持つたまゝ、また靜つと立つてゐまし



た。

先生は吃驚しました。石地藏がまるで、下僕か何ぞのやうに、その子供のお伴をしてゐる格好でした。

と、見てゐると、子供は、これも、つい傍らにある石で拵えた馬の上にひらりと飛び乗つて二三度、足で、馬の腹を蹴る眞似をしたかと思ふと、不思議にもその石の馬が、ぼか／＼駈け出しました。

先生はすつかり驚きました。

一度駈け出した馬はなかく止まりませんでした。かなりの高さの山を、山の巔きまで駈け上つたかと思ふと、間もなく馳せ下りました、先生が呆氣にとられ

て見てゐると、子供は石馬に乗つたまゝ、とう／＼その山を四五回も上つたり下りたりして、丁度、馬の稽古かなんどのやうに、しかも、さうしてゐる子供の姿

は、教室や運動場で見るとやうな氣拔けのした姿とは打つて變つて、天晴れの勇士



のやうに、生々した方に充ちてゐました。

『おい〜……………』

餘りの不思議さに、先生は遂ひ聲を掛けました。

すると、今迄、夢中で石馬を乗り廻してゐた子供は、きつと邊りを見廻はして

下の方の木蔭から先生が呼んでる姿を見ると、はつと驚いた様子をいたしました

『お家へ歸へらずに何をしてゐるんだい、君は……………』

先生は、かう訊きました。

と、子供は、その聲を聞くと同時に、今まで止めてゐた石馬の腹を二三度蹴つ

たかと思ふと石馬はまつしぐらに駆け出しました。そして後をも見ずに、馬腹を

蹴りながら、丁度平野を駆けけるやうに、先生の見てゐる眼界から向うの方に消え

て了ひました。

先生は何うしたことかと、全く呆氣にとられて、そこに立つてゐました。それ



はもう日暮れで、人の顔も判然とは見分け難い時刻であつたといふことです。

それつきり、子供の行衛は分らなくなりました。そして、それが何ういふ譯で

あるか、只怪譚として傳へられてあるだけで、その理由は分らないのです。丁度

支那の道光二十年（約八十二年許り前）の出来事であります。

今一つ不思議なことには、その石地藏は今に至るまで、その手にちやんと子供

の書物をいれた鞆を持つてゐるといふことであります。

千日酔ふ酒

支那のあるところに、狄希といふ人が不思議な酒を造つてゐました。その酒は千日酒といつて、一杯飲むと千日の間は酔が醒めないといふのです。

狄希の家の近所に、劉玄石といふ酒好きがゐりました。ある時ふとこの酒の話を聞くと、

『そんな珍しい酒があるなら、一杯でもいいから飲んで見たいものだ。』と思つて、早速狄希のところへ出掛けて行きました。

丁度その時、狄希は造つてをいた千日酒がなくなつたので、新しい分を造りかけてゐました。

『まことにすみませんが、何卒お酒を少し戴きたい……』

劉玄石は畏るゝ頼みました。すると狄希は、

『切角ですが、千日酒は今造りかけてゐるので未だ上げることが出来ません。』と、きつぱり断りました。

すると劉玄石は。如何にも口惜しさうに狄希の顔を見つめてゐましたが、

『でも、折角珍しい酒の話を聞いて、飲まないでゐては本當に残念です。一口でもいいから飲ませて下さい！ 造りかけでも何んでもよろしい！』としきりにせがみました。

狄希は仕方なく出来かけの酒を小さな器へ一杯入れて出しました。

『やあ、これは有り難う——』

劉玄石はさういひ乍ら、狄希の手から器を受取つて、美味しさうに飲みました。そして

『あゝ、美味しい、美味しい。』といひました。



劉玄石は飲み終ると、まだ飲みたさうに器を手につたまゝぼんやりしてゐました。が、狄希は入れてくれませんでした。劉玄石はたまらなくなつて催足しました。

『これはなか／＼美味しい酒ですな……すみませぬが、もう一杯貰へませんか？』

すると、狄希は目を丸くして、

『もう一杯？ 莫迦なことをおつしやい。その一杯でも千日の間は酔が醒めませんよ。今日はこれでお歸んなさい。また醒めたら上げますから……』といひました。

劉玄石は少しきまりが悪くなりました。それで狄希にお禮をいふとすぐそこを出ました。途々大へんいゝ氣持で小唄を唄ひながらやつと家の門まで歸つて來ると、なんとなう身體中がぼてつて、目の前がだんだん見えなくなりました。さう

して氣分が軽々と楽しく、極樂の様なところへ舞ひ上るやうな氣持がします。それでも劉玄石は門關から部屋へ入つて行きました。そして間もなく部屋の真中で打倒れました。……

何時迄經つても劉玄石は起きませんでした。家の人たちは初めのうちはうたゝねをしてゐるものと許り思つて別に心配もしませんでした。が、二日も三日も經つとへんに思ひました。そしてたうとう、

『劉玄石はきつと歿くなつたのに違ひない。』

家の人々は皆さう思ひました。で、相談の揚句お葬ひをしました。劉玄石は棺桶の中へ入れられて、墓の下へ埋められてしまひました。

それから三年の間、何ごともなく經つてしまひました。ある日、狄希はふと劉玄石のことを思ひ出して、





『もうあの男の酔も醒める筈だが、どうしたらう。一寸尋ねて見よう。』と思ひ乍ら、劉玄石の家へ行きました。そして、

『玄石はお宅にゐらつしやいますか。』と聞きました。

すると家の人はへんに思ひ乍ら、
『玄石は疾うになくなりまして、丁度忌みが明けたばかりです。』といひます。

狄希はびつくりしてしまひました。
『もし、それは大へんなことをなさいました。玄石は私の美味しいお酒を飲んだので千日の間眠つたのです。やつと今頃酔が醒める頃でしょう。』といひました。

さう聞くと、家の人たちはびつくりしました、そして、あはて、狄希と一緒に墓を掘りに行きました。

掘り返すと、だん／＼墓のあたりがムツとして息が詰りそうになつて來ました。



やつとのことで棺桶を出してこはして中を見ますと劉玄石はバツと眼を大きく開いて、ハア／＼酒臭い息をして、

『あ、いゝ氣持だ。』といつてゐました。そして狄希を見付けると、

『君の酒は實に不思議だね。一杯飲んだだけでこんなに酔拂つてしまつた。』

……もう何時頃だらう。』と訊きました。

墓の傍に集つてゐる人々は、余りの可笑しさにごつと笑ひ出しました。そして千日酒の不思議なことに驚きました。

劉玄石は皆が笑ひ出したり、廻りの様子がへんなので、目をバチ／＼させてばんやり見廻しました。

劉玄石の酒臭い息にあてられた人たちは、誰もみな三月の間眠りました。

三娘子出よ

三娘子は唐の板橋と云ふ處の近くに住んで驛店を營んでゐました。驛店と云へば日本で云ふ宿屋のことです。

三娘子には夫も子もありません。その代り家には召使の外に牛や馬を澤山飼つてあつて旅人がゆづつてくれと云ふと大へん安く賣つてやりましたので世間では三娘子の宿屋のことを慈善宿屋など云つてゐました。

ところがこゝに陳季卿と云ふ文士があつて長安の都へ旅行の途中で、この宿屋に泊りました。

宿ではその時、五人ばかりの客が前から泊つてゐたので陳は奥座敷で寝ることになりました。

頃は、草木も眼る丑満時。

陳季卿の寝てゐる隣の部屋で怪しい物音がしはじめました。

『おや！今頃何の音だらう。』

目を覺した陳季卿は怪しい物音がある壁の方を凝つと見詰めました。すると黒い壁の中に紅玉を嵌めたようなところが見付かりました。壁に小さな穴があつて隣室の燈火がそこから洩れてゐるので。

陳季卿はそれを見付けるとす早く寢臺から飛び下りて壁の穴にびつたり片方を押しあて見ました。

さて陳季卿は壁の穴から何を見ましたでせうか。

まづ第一番に目に寫つたのは燈火の影に座つた女ですが、よくよく見ると宿の主人——三娘子であります。

三娘子はやがて四邊をキョロ／＼見廻してから、怪しい箱の蓋を開いて中から



二尺ばかりの木馬、それから犁と鍬を取りだしました。

『こりやいよ〜怪しい。何をするのだらう。』

息をこらして陳季卿が見てゐますと、三娘子は箱の上に土をしいて畑にしてバラ〜と蕎麥の種を蒔きました。そして木馬を動かして土を耕しはじめました。見るみるうちに立派な畑になつて、蕎麥は可愛らしい芽をだしてやがてスク〜と延びて花を開き實を結びましたので、陳季卿はまるで狐に化かされでもしたやうに呆然してしまひました。

『これは夢を見てゐるのか知ら？』

と陳季卿は自分の目を疑ひましたが、たとへ夢にしたところがこの上もなく面白くして怪しい夢なので、そのつゞきが見たくてたまらないので猶も息をこらして見てゐました。

三娘子は木馬を箱にしまひこんで了ふと、蕎麥の實をとつて見てゐる間に、

甘しさうな蕎麥餅をつくりました。

さて、それから三娘子は何をしたでせう。

残念ながら、三娘子は蕎麥餅をつくつて了ふとブツと燈を消しましたので、部屋は眞黒けです。眞暗では何も見えませぬので、陳季卿は寢臺へ戻つて眠りに就きました。

ところが次の朝になると意外なことが起りました。

翌る朝――

陳季卿は御飯を食へに食堂へで、行きました。すると案の掟、三娘子がゆふべの蕎麥餅をもつて来て、

『さあ、皆さん一つ召しあがつて下さい。』と云つて皆の前にさしだしましたが陳季卿は愕然としてしまひました。

『こりや大變。もしもこの怪しい蕎麥餅を食へたらどんなことになるか知れた



ものでない、あゝ恐ろしい。これりやごうかして食べぬ工夫をしなければならぬ』
それで陳季卿が考へだした工夫は、腹痛と云ふ逃げ口上です。

『おかみさん。せつかくの御馳走ですが、私はお腹が痛みますので、御馳走が
いただけませんから失禮します。』

断りを云ひながら陳季卿はしかめ面をして腹を押へながらそつと食堂をでてい
きました。そして物陰にかくれて食堂の様子を覗つてゐましたが、思はずアツと
驚きの聲を挙げました。

驚いた筈で、バク／＼蕎麥餅を食べた五人の客は、蕎麥餅を食ふや否や、キャ
ツと鋭い悲鳴をあげながらドツサリ地に落ちて、たちまち牛や馬の姿になつて了
ひました。

『ワツ！化物屋敷だ！』

陳季卿は命から／＼逃げだして長安へ道をいそぎました。

そして長安からの歸り道、陳季卿は何か考へることがあつて、途中で澤山な蕎
麥餅を買つてまた三娘子の宿に泊りましたが、この晩は外に相客もありませんで
したので陳季卿は三娘子から大へんな御馳走をされました。そして寝る時になる
と陳季卿は、奥座敷が静かでありからあの部室で寝させてくれいと頼んで、三娘
子の隣室で寝ました。

さてそれから、化物がおでましになるのに都合のいゝ時刻、例の丑満時になると
陳季卿は、壁の穴を覗きました、すると前の時と同じやうに三娘子は箱の中から
木馬をだし蕎麥を植えて蕎麥餅をつくりました。

その翌る朝。三娘子はいつものやうに蕎麥餅を陳季卿のところへもつて来て、
『一つ召しあがつて下さい。』

と澄した顔で云ひましたが、食べては大變ですから、三娘子がお茶をとり引
返した間に、陳季卿はす早く自分が買つて来た蕎麥餅をとりだして、三娘子がも



つて来たものと取りかへて置きました。そして何食はぬ顔をして、

『おかみさん。御馳走様でした。蕎麥餅は大へん甘しうムいました。私も蕎麥餅が大へん好きなものですから途中でこの通り買つて参りましたから一つ召しあがつて下さい。』

と云ひました。

が欺されるとは露知らぬ三娘子は、

『御馳走様です。』

と云つてヒヨツと一つつまんで食べますと、さあ！罰はテキ面です忽ち地に落ちて牡馬になつてしまひました。

X X X X

陳季卿は自分の計略がうまくいつたので大喜びで早速三娘子の牡馬に乗つて諸國を旅行して歩きましたが、馬は脚がたつしやで、どんな山でも坂でも平氣でど

ん／＼馳りました。

それから五六年後、陳季卿は蜀と云ふところへいききました。ところが途で出會つた白髪の老人は、陳季卿の乗つてゐる馬を見ると、突然、カラ／＼と大口開いて笑ひながら、

『君は三娘子ではないか、ひごく落ちぶれてたものだネ。』と云ひました、そして陳季卿に向ひ、『實は貴方……この三娘子は昔ずるぶん悪るいことをしたのでこんな目に會つたのですよ。だがもうずるぶん苦しんだことでせうから許してやつて下さい。』と云ひましたので陳季卿は早速に承知をしました。

すると老人は牡馬に向つて、

『三娘子出よ。三娘子出よ。三娘子出よ。』と三度唱へて馬の額をボンと叩きまゝすとあら不思議……額はサツと破れて吹きだす白煙。そして白煙の中から目も覚めるやうな美人が現はりました。云ふまでもなくその美人は三娘子でした。



幽霊を賣つた話

昔支那に宋定伯といふ人がありました。若い時分、ある夕方外をぶらぶら歩いてゐると其處へひよつこりとやつて來た幽霊に、

「俺は幽霊だが、お前も仲間かな。」と尋ねられました。宋定伯はそう云はれるとその時は慄然としましたが、直ぐと、こいつ一つ幽霊を騙してやらうと云ふ氣になりました。

「えゝさうですよ、私も幽霊です、でもまだ新米の幽霊ですから」と定伯はかう答へました。

「おゝさうかね、俺はこれから市場まで行かうと思ふのだが、お前は何處へ行くのかね」幽霊はまたさう話しかけました。すると

「私もその市場へゆく所です」と定伯は云ひました。其處で、では一緒に行かうといふことになつて、幽霊と定伯は歩き出しました。が幽霊は何うも定伯のやうに、さつさと歩くことが出来ませんので、間もなく

「俺は何うも思ふやうに歩けなくていけない何うだらう、二人で交るゝ背負ひあつて行かうぢやないか」と幽霊は申しました。定伯は之れもよからうと、直ぐ承知したので、幽霊は先づ先きへ定伯を背負ふことになつて、ものゝ十三四町も行きましたが、何うも定伯が幽霊に似合はず重いので、幽霊は骨が折れて迎ふこと、もう歩けなくなりました。

「お前は幽霊にしちや馬鹿に重いね」と幽霊は堪り兼ねて云ひました。定伯は悟られてはならないと思つたので、

「あゝさうですか、それはまた私が新米だからでせうよ」と胡麻化して、今度は定伯が幽霊を背負ひました。ところが、その軽いことゝ云つたら、殆んど背負つ



てゐないと同様でした。

かうして背負つたり背負はされたりして行く途中で、定伯は幽霊にこんなことを尋ねて見ました。

『私はまだ新米の幽霊だから何も知りませんが、幽霊に取つては何が一番禁物なんでせうね。』

『そりや人間の唾が一番恐しいね』幽霊は彼の間に對して即座に答へました。

聽て二人は橋のない川端へ出ました。定伯は少し躊躇いたしました。幽霊は水音一つ立てないで、さも樂々と水の中を行きました。定伯も仕方なしに水の中へはいつて渡りました。と幽霊はジャブン／＼水音をさせ乍ら來る定伯を振り返つて見て怪訝さうに、

『何うもお前は變だね、いくら新米にしてもさう水音を立てるものではないがな』と云ひました。定伯はごきつと胸をさせましたが、折角／＼まで來て、もう市場

も近いと云ふのに覺られるやうなことがあつてはならないと思ひました。

『え、そりや仕方がありませんよ、まだ幽霊になつてから川を渡るのは今が始めてなんだすからね、追々馴れ、ば音なんかしなくなりますよ』定伯はまたかう胡麻化しました。

『成程それもさうだな』幽霊はさう領いて、

『今度は俺が背負さる番だよ』と云ひました。

定伯はよし來たとばかりに幽霊をしかと背負ひました。そしてぐつと力一杯に抑へつけました。

『おいおい、そんなに強く背負つては苦しいよ、幽霊といふものには、力なにかいらぬものだ。おいおい、さうしめつけちや苦しいぢやないか、おいおい、もう澤山下して呉れ！』餘り定伯がギューギューとしめつけるので幽霊は吃驚して叫びました。併し定伯はそんなことは耳に入れないで、そんなことがあつて





も離すものかと、一生懸命に市場まで急いで行きました。
 市場まで来ると、定伯は背負つてゐた幽霊を地べたへ叩きつけました。と何う
 でせう？ その幽霊はその途端に一匹の羊に化けてしまひました。
 すると、定伯はその時フト先刻、幽霊には人間の唾が一番禁物であるといつた幽
 霊の言葉を思ひ出して、その羊が、また他のものに化けないうちにと思つて、早
 速自分の唾を羊になすりつけました。其處で羊に化けた幽霊はもう再び幽霊に復
 へることも、亦他のものに化けることも出来なくなりました。
 定伯はその羊を曳いて行つて、よい値で賣り拂つてしまひました、そしてお金
 を澤山懐中に入れて自分の村へ飛んで歸りました。
 幽霊を賣つてお金をもうけたのは、世の中には恐らく、この宋定伯一人位のも
 のでせう。

學者と弟子の夢

昔支那の或る都に、世に知られた學者が住んで居ました。其の頃方々の國から
 この人の名をしたつてはるばると尋ねて来て、この人の弟子にならうとする者が
 大變澤山にありました。

自分をしたつて澤山の人が弟子になりたがつて遠くの方からやつて來たのをみ
 た學者は自分は大變に偉い學者である、實際はさう大して偉くもないにかゝは
 らず飛んでもないうぬぼれを起しました。

その中に或る年の夏が來ました。
 この學者は大變なまけ者で、此の頃では澤山の弟子をほつぱりばなしで、毎日
 庭に出ては、よく風の通る冷しい木蔭で、夕方までもよい氣持にグッスリと寝て



おました。

そのくせ、あまり弟子達にせめたてられていやいや本の講義などをたまにやる様な時に若しも弟子の者で少しでもわきみをしたたり他の事を考へてゐたりする者がありますと、無精に怒つて、その者に對つて重い罰を與へました。

或る日のことです。

この學者は二月振り位でやつと今日講義をやることになりましたが、この日は又殊更に熱い日でしたので、さすがに熱心な弟子達も熱さを堪へることが出来ませんでした。

學者も少し講義を進めた頃から、そろそろと眠氣をもよほしたが、間もなく今迄室にひびいてゐたいかめしい講義をする學者の聲が聞えなくなつたのに氣がついて弟子達が學者を見ますと、學者は本を屏風のように立てたまゝ、その陰で、ぐうぐういびき聲をたてておました。これを見た弟子達はクスクスと笑ひ出しまし





た。

これに氣がついてハツと思つてめがさめた學者は氣まりが悪いやら、腹立たしいやらで、顔を赤くし乍ら、それでも、何か自分の氣分を晴らす様なことはないかと、ギロギロと弟子達の中をにらめまはしました。すると恰度折悪しく室の一番隅つこに一人の弟子が机の上になつて、さつき學者がやつてゐた様な恰好でうとうととゐねむりをしてゐました。

その弟子といふのはつい此の間この學者の所に來たばかりの澤山の弟子の中でも一番新しく、一番年若い美しい少年でした。

これに眼のとまつた學者は心の底でめめたと思ひ乍ら、ひよつくり立ち上るとその弟子の前につかつかと進みよりました。そしていきなり足を上げると、何も知らずに無邪氣にもゐねむりしてゐる少年を力一杯に蹴飛ばしました。そして力の限り大きな聲で、



『馬鹿者奴が、俺が講義をしてゐる最中に何んとして貴様はゐねむりなんかしてゐるんだ。』ハツと思つて眼がさめた少年は、自分の前に怒りの爲めに顔中眞赤に染め乍らざなりたててゐる學者を見ると、すつかりしよげてしまひました。

それから學者は心ゆくまでその少年をひどい目にあはせ、ののしり立ててゐましたが、少年はちつと眼をつぶつたまゝ、何んとも云はうとはせず、打たれるのを逃げ様とさへもいたしませんでしたが、一方、ののしり勞れ、打ちつかれた先生が、もうこれ以上何んとののしつたらよいか、どれ程強く打つたらよいかわからなくなつて、ぼんやりと少年の顔をにらみつけてゐると、この時始めて少年は眼を開き、そして學者に對つて次の様な問ひを發しました。

『成程、先生はたしかに世に譽高い大學者ではゐらつしやいます。けれど同じ人間といふ立場から見たら、先生も私も一つ人間ではゐりませんか。それに何んで睡い時に先生計りはねむつてもよい、弟子の私はねむつてはいけぬといふことが

ありませう。

この少年の言葉を聞くとさすがうぬぼれの深い學者も一寸その理窟をさがすのに困りましたが、どこまでもがうまんに、そしてどこまでも負けずぎらひの學者は、

『何んだと、それではお前は私があるねむりをしてゐるんだと思つてゐるんだな。馬鹿な奴だ。何んで俺があるねむりなんかしてゐやう。お前みたいな奴には分らないんだらうから聞かせても無駄だが、師匠の情けで云つて聞かさう。俺はいつも斯うしてみては夢に行つて世にも得がたい道を得る爲めに聖人に面會をし、彼と種種問答したりしてゐるのだ。』

と云ひました、すると少年は答へました。

『さうですか、實は私も只今夢に聖人と面會をしてゐたのです。私は今その聖人の先生のことについて色色と話をしてみました。けれど惜しい事に其は先生のお

怒りの爲めに途切られて了はなければなりませんでした。』

さう云はれると學者は急に不安になつて來ました。だつて、彼はあは云つた様なもの、それはほんの思ひつきであつて、夢の中は愚か一度だつて聖人になんか遭つたことがありますでした。そこで問ひました、

『俺のことについて聖人と話をしたといふが一體どんなことを話してゐるんだい。けれど俺にはその話がよくわかるよ。その聖人はきつと俺のことを偉い學者だとほめたにちがひない。そして俺が度度訪れることを喜んでお前に話したらう。』
ニツコリと笑つて少年は答へました。

『いいえ、先生それはちがひます。私が初めてその聖人に逢つた時、私は第一番にその聖人に對つて尋ねました。貴下は御存知でせう、貴下の親友であつて、そして今吾國で名高い私の先生を。——と、けれどさう云つて、私が聖人の方を見ますと、聖人は如何にも思ひ出せないといふ様な顔をして頻りに思ひ出さう



としてゐましたが、直にその聖人は私に對つて、自分は其麼人には一度も逢つた
覺えがないから知らぬ』と申されました。

二度目の夏が再びやつて來ました。けれどこの學者の下にはたつた一人の弟子
も居ませんでした。

天上の桃

てふぞ春祭りの日で、町では、爆竹がボンボン景氣よくひびき、色とり／＼目
もさめるばかり美しい紙旗はヒラ／＼と春風に翻へり、町の人には大人も子供も
命の洗濯と云ふのでニコ／＼しながらワイ／＼騒いでをりました。ですから常日
頃は、お閻魔様のやうな恐い顔をしてゐる役所の役人達も、ニコ／＼顔で赤や黄
を紫の官服を着て、役所の前の石段に立つて、にぎやかな町の有様をニコ／＼し
て見てをりました。すると、その前へひよこり現はれたのが白髪を胸のあたりま
で垂らし、背中には大きな朱塗の箱を背負つた、鶴のやうに瘦せた仙人のやうな
おちいさんです。

おちいさんは、石段の前まで來ると、役人に向つて丁寧に叩頭をして云ひまし



た。

「お役人様——今日はい、お祭りでお天気もよく結構なことでムいます。このぢいはいは手品を使ひますが、皆さん、手品をごらんになりませんか。お代はごらんになつてからでよろしうムいます。いろ／＼めづらしい手品をごらんにいれます。

老爺は、手品師だつたのです。ところが、役人達は、顔はニコ／＼顔でしたが、先程から退屈で退屈で困つてゐた折なので、てふぞ好い慰み好い観物が出来たと云はぬばかりの顔付で、

「やるがよからう。せい／＼奇抜な奴を見せてくれ。」と云ひました。

「ハイ／＼、それはどうも有難うムいます。けふの商買始めに、とてもものこと奇抜な奴をご覧に入れませう。」

老爺は、ピヨ／＼、叩頭をしながら、早速、背から朱塗の箱を地べたに取り下して、蓋を開けました。

すると桃の中から桃太郎さんでありませんが、これは箱の中からひよいと飛びだした十二三の辨髪にした可愛い目のくつりとした男の子。

男の子は、箱からでると、ピヨイと役人の方を向いて頭をさげました。役人は一寸驚いた顔付で、

「これ／＼老爺や……それは御前の倅かナ。」

「ハイ／＼仰せの通りでムいます。この子がこれから手品を使つてご覧に入れるのでムいます。まづ最初は……」

老爺は俯向いて返事をしながら、朱塗の箱の底から、蛇のやうにとぐるを巻いた縄を取りだして、すつくと立ちあがり片手に輪になつた縄をつかんで、倅に向つて大聲で、

「さあ／＼、始まり始まり……さあ、倅やこれから、ちよいとこの縄につたつて天に登つて、西王母の御園にある桃を取つて来て、あれなるお役人様にあげてく

れ。』と云ひました。

ところが、その口上を聞いて吃驚したのは役人、目を見張つて、

『これ〜老爺……好い加減な冗談口を叩くのは止して、早く本物の手品を見せぬか、天などへどうして登れるものか、馬鹿らしい。』とブン〜恐つてゐますが老爺は澄したもので、

『まあ、お役人様……手品もご覧にならぬうちからさう恐らつしやるものではございません。まあ、黙つて見ておいでなさいませ。この老爺は、嘘は申しませぬ。

天上へ登れるものか、登れぬものか、今直ぐごらんに入れます。天上へ登れませぬ節には、老爺の首をお斬りなさへませ。』と云ひ終つて、老爺は、ハツと掛聲勇ましく、片手の繩を颯つと空をめぐらして投げあげました。

と、あら不思議……さあ皆さん、これから世にも不思議な手品が行はれるのですよ。さあ、よろしいですか。さて、繩は、ごうなりましたでせう。ぼつたり地べた

へ落ちて来たでせうか……落ちてしまつては、この奇らしい話もこの不思議な手品も臺なしになります。

颯つと風を切つて、空へ舞上つた繩は、落ちてくるどころでなく、上へ上へと昇つてたうとう雲をつき破つて、繩は天上からすーつと一本の棒のやうに地上に垂れ下りました。すると、空を仰いで待ち構へてゐた男の子は繩は両手で握つたかと思ふ間もなく、猿のやうな身軽さで、スル〜と繩を傳つて上へ上へ……役人達が呆氣にとられて空を仰いでアレヨ〜と騒いでゐるうちに、男の子の姿は段々小さくなり、しまひに黒豆のやうになつて、白雲の中へすーつと消て了ひました。

役人達の驚き様……それにひきかへ憎らしい程落付いた様子でニヤ〜笑ふ老爺。

『さうも驚いた!』さうも不思議だ!』

『まるで狐に化かされてゐるやうだ。』

役人達も見物に集つた町の人々も、空を仰ぎ見ながらワイ／＼騒いでゐるうちに誰か大聲で、

『見えた、見えた。』とまるで、飛行機を見つけたやうに叫んだ者があります。

『アツ！ 男の子だ！ 降りて来るぞ。降りて来るぞ！』

人々がワイ／＼騒いでゐるうちに、雲の上に現はれた男の子は、見る見るスル／＼と繩を傳つて降りて来ました。そして、パイと地上に立つた男の子を見ますと、手には、つや／＼した盃のやうな大きな赤い桃が一つ。

『父ちゃん……取つて来たよ。』

云ひながら、男の子が差出した桃を、老爺はニコ／＼顔で受取ると、うや／＼しい手付で役人の前に差出して、

『ごらんの通り……桃は首尾よく天上から取つて参りました。一應、おあらため

を願ひます。』と得意な顔には、ごんなものだ俺の手並はと云ふ自慢の色がありあり浮んでゐました。

『ウム……これは不思議不思議、正しくこれは桃、而も地上にはない立派な桃だ。喃老爺もう一度桃を取りにやつてくれないか。』

役人達は、まるで金の玉でも掌にのせたやうな具合で、桃をくり／＼廻して見ながら、一同は聲をそろへて云ひました。

『お安い御用でムいます。では、もう一度取りにやらすことに致しませう。喃、伴……御役人様の御所望だ、もう一度、氣の毒だが、桃を取つてきておくれ。』

『あいよ。』男の子は氣輕に答へて、又繩を傳つて、スル／＼と天上へ登つていきましたが今度はどうした譯か、一分、二分、三分……なか／＼男の子は歸つて来ません。

『何したといふのだ。馬鹿に遅ぢやないか。』



『左様さ……ひよつとする、天氣が好いのであの子供は天上の桃園でひる寢をしてゐるのかも知れんぞ。』

役人達も町の人々も、こんなことを口々に云ひながら空を見上げて、男の子の姿が現はれるのを、今か今かと首をだるくして待つてゐます。

ところへ、俄にひゆつと風を切つて、人々の目の前に丸いものが空から落ちて來ました。

『アツ、大變だ、首だ、生首だッ。』

見物人の驚きの叫びが終らぬうちに、又してもドツサリ空から落ちて來たもの……今度は胴體です。

『や、や、や、これは首だ！ 俵の首だッ！ お、俵はたうく桃園の番人に見付かつて、斬られてしまつた。これ、俵、何といふ姿になつてくれたのだ。』

老爺は、氣も狂はんばかりの様子で、生首を胸に抱き絞めて、をい〜聲を擧

げて泣きはじめました。

役人達も見物人もあまりの意外な出來事に色を失つて、ごうなることかと老爺のまはりを取圍んで呆然としてゐました。

老爺は首を抱て泣きながら役人達に向つて、

『喃もしお役人様……貴方達が、もう一度桃を取つて來いとお言付になつたばかりに、俵は桃園の番人に見付かつて青龍刀で斬られ、こんな淺ましい姿になつてしまひましたもし、お役人さん……前にも申しあげた通りこれは私のたつた一人の俵……この俵に死んでしまはれると私は、明日から手品も出來ず乞食をせばなりません。もし、お役人さん……この子を元通りにして下さう。』

と大聲でわめいてオイ〜泣きだしました。

役人達は、怖々した様子で生首を眺めながら老爺の云ふことを聞いてゐましたが、誰の胸にも飛んでもないことになつてしまつたものだ、之は自分達が元々惡





いだからお金を澤山老爺に與へて許しを乞ふより他に仕方がないと思ひました
皆相談の上で云ひました。

『老爺、そんな無理を云はず、お金をどつさりあげるから許してくれぬか。』

『よろしうムいます。幾ら私が無理を申してみましたところが、首を斬られて殺
された子が元通りになる譯がムいませぬ。これも皆、私の不運とあきらめること
に致します。ですから、私が乞貧をせいでよろしいだけのお金を下さいませ。』

そして老爺は、やがて役人から澤山のお金を貰ひました。

老爺は、金を貰つてしまふと、生首と胴を朱塗の箱に納めて、背にかついでトポ
くと去りました。そして、老爺は、にぎやかな春祭の街を抜けて、人通りのな
い淋しい町はづれの森まで來ると、朱塗の箱を背からおろして、蓋をボンと開き
ました。

箱の中からピヨイと飛び出したものは、三つ目入道か一つ目小僧か蛇か……い

よ〜、皆さん、驚いてはいけません！ さき程の男の子で、ニコ〜笑ひなが

ら、

『父ちゃん……うまくいつたね。』

何と皆さん、驚いたでせう。



黒牛の皮

(一)

人は一度死ねば心ず閻魔の廳へ行くのださうです。其處で地獄か或は極樂へ行
くのが定まるのです。支那にこんなお話があります。

昔、支那の洛陽の街に陳さんと云ふとてもひどい不精者がありました。一體支
那の人には往々この陳さんの様なのらくら者が居ますが陳さんと來たら格別ひご
い不精者です。

「腹はへるし日は暮れるし、さうと云つて動くのはいやだし。」陳さんは今日も又
ぼんやりと長い扉の下に座つたまゝ、獨言を云ひました。古ぼけた門が行手に一
ぱいの夕日を浴びて立つてゐます。時々通る人々はその通り過ぎて陳さんを

見返る人もありません。

ものうい景色の中に陳さんはぼかんと空を眺めてゐました。空にはうろくくと
油の様に夕日が輝いてゐます。氣の早い三日月がもう白く出て來ました。總て氣
の毒な腹の減つた陳さんには一向御構ひ無しの様に見へました。

丁度陳さんの頭の上に扉の中から一本の柘榴の木が美しい實を一ぱいつけて道
の方へたれてゐました。口の割れた熟した柘榴は今にも落ちさうに見へました。
南京栗鼠の眼の様な紅色の小つぶがいかにも美味さうでした。

「あゝ、腹は減るし日は暮れるし……」

陳さんが欠伸まじりにつぶやき始めた時はたりと大きな柘榴の實が遠慮なく口
の中へ落ち込みました。

「あつ」と陳さんは眼を白黒させて暫くもがいてゐましたが持前の不精で口の中
の柘榴を取るのに手を出す事もせず其のまゝ息が切れて死んでしまつたのです。



此世と地獄との間に闇穴道と云ふ道があつて陳さんの魂は赤鬼共に引立てられて澁々歩いて行きました。氷の様な冷い風がびゅうびゅう吹き荒んでるて全く足が進みません。其の度に鬼共の鐵の鞭がびしびし鳴りました。風は物凄程陰り立て、陳さんを宙に飛ばす様な勢で吹きまくりました。流石不精者の陳さんも之には驚いて駈ける様に歩かねばなりませんでした。

やがて立派な御殿が見えました。大きな字で森羅殿と書いてあります。此處へ來ると風はぱつたり静つて暖い風がそよよ吹いてゐます。陳さんは恐る恐る階の上を見ますと赤鬼青鬼共が多勢ずらりと並んでゐる中に一人の立派な王様が黒の袍に大きな黄金の冠を被つてこちらを眺めて何かしきりに本を調べてゐます。陳さんはぶるぶる木の葉の様にふるへながら恐る恐る地面へ跪きました。「やい、其の方は何の爲に柘榴の實を口から出さなかつたんだ。愚者奴つ」閻魔大王の雷の様な大聲が陳さんの頭の上で大砲の様に響きました。陳さんはあの



世にゐる時人の噂に聞いて閻魔大王は恐しい人だとは思つてゐましたが其聲の凄いことには今更ながら驚いてしまつて不精者も今は生きた心地もしません。陳さんは小さな聲で「實は、その何で、つまり面倒なので」と申し上げました。然し聲は大王の耳には入りませんでした。

「こら、返事をいたせ、地獄の呵責に遇はせて欲しいか、ごうぢや」重ねて大王の大音聲は陳さんの腹の中まで轟き渡りました。短氣な閻魔大王のことですから陳さんの不精さに無と暗腹を立てゝゐます。然しこちらは名代の不精者の陳さんです。一度した返事を又くり返すのが面倒臭くて黙つて大王の顔を見上げて只一言へいと申し上げました。

「うゝむ、無禮な罪人じや、それ追立ろ」
と大王は手にした笏を振り上げて髪を逆立て、傍の鬼共に命じました。すると二三匹の鬼共がごやごやと下りて來て驚く陳さんの首筋を掴んでいきなり引立て、

行きました。

(11)

「おい、仕度は出来たか。『うむ丁度い、加減だ』鬼共は大きな釜に油がぶかぶかたぎつたのを眺めて話し合つて居ます。陳さんは大あわてにあわて、立つたり座つたりして油の煮えるのを見て涙をこぼしてゐます。『やい、罪人、じたばたするな。』一匹の赤鬼は矢庭に陳さんの腕を掴んで一氣に釜の中へ投げ込みました。『ヒヤッ』陳さんは可哀さうに油の中で二三度浮き沈みしてゐましたが遂々見えなくなつて了ひました。

吹き渡る夜風の音に陳さんはふと正氣づきました。冷々した空気が釜ゆでになつた陳さんの身體にはいゝ具合に感じられます。森羅殿の庭です。人の話に聞いた通りの劍の山や血の池がはるか向ふの闇の中に並んでおります。焦熱地獄の焰

の森がありくと天の一角に見えました。火の車は不斷の勢、燃え廻つてゐます。唸る者、泣き號ぶ者、息もたえだえになつて横たはつてゐる者が陳さんのまわりにもずらりと並んで倒れてゐました。陳さんは今更なかな恐しさに身ぶるいしました。

陳さんの身體には無残にも劍の跡や焰に焼かれた跡が一ばいついてゐました。鬼共は大王の命令通りに種々のあらゆる責苦に遇はしたのです。陳さんは其の傷跡を眺めて苦しかつた事を思ひ出してぞつと身ぶるいをしました。陳さんはじつと眼をつぶつてしまひました。

「何、此奴未だ白狀しないとな。フーム。『流石の大王も眉をひそめて暫く思案に暮れましたがやがて書記を呼んで帳面をくり始めました。陳さんは息も絶え絶えに倒れ伏してゐました。』

「こら、其の方は不精者なれば黒牛にしてしまふぞ、それ黒牛の皮を持つて參れ」



閻魔大王は森羅殿も破れるかと思ふばかりの大音聲で喚きました。一匹の鬼が『はつ』と答へながら棚に掛けてある多くの獣の皮の中から一枚の黒牛の皮を持って来て倒れてゐる陳さんの身體にびつたりとはり付けて了ひました。陳さんは驚いて大聲で何か叫びましたがその時はもう悲しげな牛の聲としか聞えませんでした。

(三)

陳さんの黒牛は畜生道へ落されて岩の多い谷間をぶら／＼うろつきながら食物を探してゐました。行く手は目のとゞく限りごつごつした岩山で一向喰へる様な物はありません。黒牛は一枚岩の上へ横になつてぼかんと空を見上げました。晴れ渡つた空は霞がかゝつてゐて夕月がぼんやり見えました。陳さんの黒牛は洛陽の塀、白い三日月、さうして絶え間なく通る人の波を想ひ出しました



さうしてたは／＼に實つた柘榴の木を思ひ出して洛陽の都をなつかしく思ひました。情を知らぬ通行人にも、なつかしみを感しました。或る日一人の書記がしきりに帳簿をくり返して見てゐました。彼は突然立つたと思ふといきなり傍の閻魔大王の袖を引いて申上げました。『もし、大王様、此間畜生道へ落した黒牛の罪人が豚が水に墜ちて死にさうになつてゐた所を救つてやつたと書いてあります』

『何、あののらくら者が、成程』大王も帳簿をのぞいて暫く考へてゐましたが後の鬼共に向つて何か命じました。鬼は急いでさつと風に乗つて宙へ舞ひ上りました。と又直ぐ一匹の黒牛を驅り立てながら下りて來ました。見ると陳さんです。獸は又どの様な目に合されるかとわな／＼とふるえながら閻魔大王の顔を仰ぎ見ました。

『やよ、黒牛、其方は多くの悪事をなした奴だが豚を救つたとやら、其の一善を



持つて宥してやらう、皮を脱がせよ』と申し渡しました。赤鬼は又陳さんの黒牛の皮を剥ぎ取らうとしましたが少し時が遅くてもう皮は陳さんの身體にびつたりくっ付いて離れさうにもありません。

赤鬼はうん／＼唸りながら腕をつかんで引張ります。その痛さと來たら筆にも現はせない位です。仕方なしに赤鬼は一匹の青鬼を呼んで今度は兩方から引張り出しました。頭を抑へ首を持つて汗だく／＼で引きますが陳さんは又身體の肉を剥がれる様な痛さです。果てはおい／＼泣き號ぶと云ふ騒ぎです。

『おい、お前はなんだ。大王様が御情でお宥し下さらうと云ふに泣くなんて。お前の御蔭で此方はすつかり汗をかいたんだぜ』

赤鬼共はふうふう息を切らせて引合ふ内にびり／＼と皮が半分程破れて取れました。陳さんは又も虫の息で喘いでゐます。

黒牛の皮は中々丈夫な強いものですからそれが引千切れる程の力で引つばられ



るので陳さんはたまつたものではありません。

其内にぼろ／＼に外の皮はとれましたが背中に一個所掌程のかたまりがついてゐてどうしても取れません。赤鬼共は仕方なしに黙つて知らぬ顔をして引上げてしまひました。眞赤になつた陳さんの背中に黒牛の毛が少し残つてゐたので

す。それからすつと後の話です。陳さんは又此の世の中へ生れ出しました。兩親は喜んで陳さんを可愛がる事が一通りではありません。所が不思議なことに背中に一掴み位の黒い獸の毛らしいものが付いてゐます。之にはお父さんが驚いてしまいました。

『こいつは鬼子ぢや。困つたことだな』

陳さんのお父さんは急いで毛を刈り取つて見ましたが直ぐに元の通りに生えてしまいます。益々弱りきつたお父さんは仕方なしに陳さんを洛陽の町の塀の下へ捨



て、了しまひました。

長い堀ほり、それは昔むかしの陳ちんさんが柘榴ざくろを喰くつて死しんだところところです。その時ときも堀ほりの上うへでは柘榴ざくろが熟じやくしてゐて紅色べにいろの實みを一いぱいつけてゐました。西にしの門もんは夕日ゆふひを浴あびて立たつてゐました。

赤あかん坊ぼうの陳ちんさんはお腹なつが空すいて來きましたので口くちを開あいて泣なき出だしました。すると其時そのときまたじゆくき又熟またじやくし切きつたざくろが一つばかりと陳ちんさんの口くちの中なかへ落おちて來きました。赤あかん坊ぼうの陳ちんさんは早速さつそく口くちの中なかへ手てを入れて取とり出だすが早はやいかむしやむしやと喰たべてしまひました。陳ちんさんはよつぼ昔むかしの事ことを悔くいてゐるらしく思おもへます。

丁度ちやうどそのとき其時そのときです。陳ちんさんの問題もんだいの背せ中なかの牛うしの皮かわがぼたりと離はなれて下したへ落おちたのは陳ちんさんの不精ぶせいが治なほつたのか閻魔大王えんまだいおうの氣きに入いつたのでせう。それから陳ちんさんは或ある立派りっぱな人ひとに拾ひろはれて後のちに偉えらい大學だいがく者しゃになつたと云いひます。

石いしの裁さい判はん

—

その邊へんにはもはやポツリポツリ桃ももの花はなかほころびて居をりました。

當時たうじ國内こくないきつての名判官めいはんぐんとして聞きえてゐる包龍頭ほうりゆうとうは、數人すうにんの從者じゆうしやを引連ひきつれて、孔子こうし様さまのお基はかに參まゐつた歸かへり途みち、赤あかい輿こしに乗のつて、この町まちをお通とおりかゝりになりました。

すると路傍ろぼうで一人ひとりの子供こどもが火ひのつくやうに泣ないてゐます。

『オイ、あの子供こどもは何故なぜあんなに泣ないてゐるのか、誰たれか行いつて訊たづねてくるがよう』





包龍頭は一人の従者を呼んでその理由を訊ねさせました。

従者は早速子供の傍に駆けていつて、いろいろそのわけを聞き訊してからその通りを包龍頭に復命致しました。

「何ッ！ その子供がお金を盗まれたと云ふのか。それは近頃珍しいことだ。子供のお金を盗むなんてもつての外だ。どれ儂がも一度シカと聞き訊して見やう。」と包龍頭は輿を下りて、まだ泣き止まない子供の傍へ歩を進めました。

「お前はお金を盗まれたさうであるがヨシヨシ何も心配することは無い。おぢさんが今に直ぐ取り戻してあげるから、サア泣くのはお止め、そしてその盗まれたお金を坊は始め何處に置いたのかな。始めから詳しく話して御覽。」

と包は子供の頭を撫で乍ら親切に云つてやりました。

子供は一部始終を残らず話しました。その話に依りますと、子供の家は酷い酷い貧乏で、お父さんが亡くなつてからと云ふものは、お母さんが一人で、他人の



裁縫や用達をして漸くその日その日を送つてゐるのです。その外に小さい弟と妹が居ますので、一番兄様であるこの子供は、毎日籠を擔いで油を仕入れに町にゆき、それを賣つてお母さまの手助けをしてゐるのです。それから又お家と申しましても、シツカリと、土の上に建つてゐる、家ではなくつて、湖水の片隅に、野鴨や鶉や、色々の水禽の巢と一緒に浮んでゐる小さなお舟に過ぎないのです。

子供は言葉を續けて

「今日も油を賣つたお金を二百文、この空籠の中に入れて、家に歸らうとこゝま

で來ました。そして僕はこの籠を、あの石の上に置いて――」

と傍にある大きなマンマルイ石を指して、
「一寸他所へ行つて歸つて來ますと、何時の間にか、籠の中に入れて置いた二百文がないのです。あゝもう明日から油を仕入れて賣ることも出來ません。お母さ



まはごんなにお悲しみになることでしやう。」

包は話を聞き終つて

「フム、それは可哀さうな事だ。おぢさんが何とか手段を講じて上げよう。お前は賣上げの二百文の入つてゐる籠をあの上の上に置いたのだな。」

「ハイ。」

「あの石の上だな？」

「ハイ。」

「籠は其儘で中味の金がないところを見ると、ウム、あの石が怪しい。あの石を取調べて見る必要がある。」

包は突然厳格な口調で命令を下しました。

「ものごも！ あの石を捕へて引立てい！」

従者はケロンとした顔をしました。命令ですから致し方がありません。四人





の者が總掛りで、漸く道端の大石を擔ぎあげて、包の赤い輿の後からドン／＼運んでゆきました。

『變な陽氣だと思つてたら、道理で、このザマだ。』

『まるで狐につまつれたやうな話だな。』

從者達は重い石の下に汗だくになつて囁きました。

この光景をワイワイいひ乍ら見物してゐた町の彌次馬連中

『豪い判判さんと云ふ評判だが、これはチトおかしいせ、何處の世界で石が金を盗むものか。そんな奇體な話は聞いたことがない。オイ！ 皆の衆、道端にこ

ろがつてゐる石が金を盗つたんだとよ。面白いじゃねえか、そんな風に裁判をするか一つ行つて見やう。』

と後から後からとゾロ／＼ついて参りました。

二

裁判所の傍聽席は面白半分に詰めよせた聽衆がでギツチリです。

銅羅が鳴り響きました。靜肅が邊を支配しました。いよ／＼法廷は開かれるのです。

包は威容を正し悠然として、一段高い裁判長席につきました。すると同時に兩側に居並んでゐた多數の高官達も一齊に着席致しました。

入口の扉の兩側には佩刀した役人がイカメシイ顔をして直立不動の姿勢を取つてゐます。

『子供の二百文を盛んだ嫌疑のある石をこれへ引けッ！』

『ハッ』と畏つて下役人共はクダンの大石を擔いで來て包の面前である法廷の中央に引据えしました。





傍聴席はドヨめき渡りましたが、直ぐ役人に制せられて元の静肅に歸りました。
「これや石！」と包龍頭は法廷中に響き渡るやうな大聲を發しました。人々は片唾を呑んで、限をバチクリさして包の顔を視守つてゐます。

「その方これなる、子供が籠の中に入れ置きし二百文について覚えがあらうな。」
石は黙々としてゐます。

「その方は、この子供が、その方の頭の上に油籠を置いて他所へまゐつた間に、その中の二百文をコツソリと窃み取つたのであらう。」

石は黙つたまゝ横はつてゐます。
「何とそれに相違なからう。」

石は依然として一言も發しません。
包龍頭はやゝ急き込んだ調子で、

「これ程穩かに訊問致し居るに一言も答へないとは不埒千萬な奴じや。拷問にか



けても白狀さして見せるぞ。ごうじや。痛い目を見ぬうちにスツカリ白狀して二百文を差し出すか。」

石は平然として黙つてゐます。
「エイッ！かへすがへすも不都合至極、ヨーシこの上は痛い目をみせて呉れる。」

包は傍の役人の方に向き直つて、
「百の笞刑じや。」

と命じました。

二人の下役人は、イヨイヨちんぶんかんぶん譯がわからなくなつて了ひました
が、命令通り、手ん手に、太い割竹を握つて
「一ツ、二ツ、三ツ」と大きな聲で數を讀み乍ら、その割竹で、ピシリ、ピシリ

と石の背中を叩き始めました。
石は悲鳴をあげるところか貧乏搖ぎ一つしません。



「エイッ 手緩い！ もそつと力を入れて打て！」

「ハッ。」

下役人は満身の力を籠めて打ち始めました。格好こそついてゐますが、終ひには、役人達の手の方がピリッ、ピリッと耐へて参ります。それでも我慢して忠實に石を打ち續けました。

「これでもまだ白狀致さぬか、強情な奴メ！ もつと打て！ もつと打て！」

二人の役人は痛さをこらへて猶も打ち續けましたが、終には叩く竹の方がサ、ラのやうに碎け折れて参りました。

「アハッハハハハハ………」と室中を動かすやうな哄笑か湧き上りました。

それは今まで耐へに耐へてゐた傍聴人の笑ひの爆發でありました。

「止めッ。」

と包龍頭は立ちあがり、怒を面に顯はして



「本官を侮辱するとは怪しからぬ傍聴人共である。あまつさへ神聖なる可き法廷の空気を、笑ひもて汚すとは言語同断の行ひ。裁判所を何と心得居るか。後日の見せしめのためこゝに居る傍聴人全部に十日の入牢を申しつける。」

さあ飛んでもないことになつてしまひました。石の裁判を見て笑つたばかりに十日間牢につなげられなければならないとは何と云ふなさけない沙汰であらう。人々は途方に暮れて打ち凋れて了ひました。

再び息苦しい沈黙が法廷に漲りわたりました。皆の耳にはドーンと大門を閉める音が響いてきました。

この時、包龍頭の唇に薄氣味の悪い微笑の浮んで消えたのを知つたものは誰一人ありませんでした。

人々は相寄つて眞蒼な顔をしてゐます。一體どうすれば良いのでしやう。すると機を見計つて包龍頭は



「然し金子二十文宛、差し出す者は許して取らす。そのまゝ歸つても差支へはなからう。」

十日間獄に入つてゐるよりは二十文は何とまあ安いことであらう。人々は蘇つた心地が致しました。そこで人々は異口同音に、二十文宛差し出すから家に歸して下さいと嘆願しました。

「ヨシツ。しからば左様致さう。先づ一人々二十文宛この壺の中に入れよ。」

包は従者に命じて大きな水壺を持ち出させました。その中には水がなみ／＼と溢れてゐます。

包はその水壺の前に立つて、じつと人々を凝視めて居りました。

第一の男が、二十文の銅錢をその壺の中に入れて側へ退くと、第二の男が直ぐ又二十文をその壺に投り込んで退く、と云ふ工合に、第二第三第四と人々は包の前を過ぎてゆくのです。



次に第五の男がツカツカとやつきて二十文を取り出すと壺に投げ込んで、あわてゝ、立ち去らうと致しました。

包は凝と水壺を見て居りましたが、ハタと膝を打ちました。よく見れば水の上はギラギラと油が浮んでゐます。これは申すまでもなく、第五の男の投げ込んだ銅錢から離れて浮いたものです。

包はそわ／＼してゐるその男の様子を見て居りましたが突然大聲を張りあげて「こ奴を召し捕れ。子供の二百文を盗つた眞犯人はこ奴である。」

泥棒はわけもなく捕まつて了ひました。

包龍頭は子供の二百文が油籠の中に入つてゐたと云ふことから一流の探偵振りを發揮したのでした。

包龍頭の奇智には人々は舌を巻いて驚嘆致しました。彼の名はかうして支那全國津々浦々までも響き渡つたのであります。



X
 その夕暮、子供は包龍頭に何邊も〜もお禮を云つて母さんや弟や妹の待
 つてゐる湖水のお家にいそ〜と歸つてゆきました。

魔法較べ

一、龍淵の相談

明の萬曆年間、神宗皇帝の世に、今の南京即ちその頃の金陵に、星祥と稱ふ魔法使ひが棲んで居りました。星祥が何か咒文を唱へますと、夜中に陽が出たり、雨夜に星が現れたり、虹が布になつたり、それは〜魂消るやうな怪しいことが易々と行はれますので、土地の人も星祥を生神様のやうに思つてゐました。處が同じ時代に、仍且支那の福建省の首府福州府に龍淵といふ妖術師が棲んで居りました。龍淵が兩の手を合せて、天の方を睨みますと、俄に空が掻き雲つて雷が鳴つたり或は地面が眞二つつに割れて、火が噴き出したり、あらゆる不思議を思ふ





儘に現しますので、これ又福州では大評判でした。従つて龍淵は、自分の術は、世界一だと獨りで自慢をしてゐたのですが、星祥の噂がだん／＼と高くなつて、今は却つて星祥の方が偉いといふ専らの人氣になりましたので、ある日龍淵は大勢の弟子を集めて、

『さてお前方に相談する事がある。それは他でもない。皆も聞く通り、金陵の星祥といふ者が、大分近頃頭を持ち上げて、この先生を無いがしろにする。未だどんな人間か、星と稱ふ者の術を看た事がない。ことによると、噂の方が大きいかも知れぬ。と謂つて、此儘黙つてゐては、この先生の名が廢るばかりだ』
『如何にも御尤です。』と弟子共は揃つてお辭儀をしました。

『其處で相談だが、場所もあらうに、福州でソナ噂を立てる處を見ると、若しか星の間牒であるかも知れない。兎に角星といふ者は不徳義な人間だ。何うであらう。この先生が一番星と術較べをして、勝てば星の首を携げて歸らうと思ふが



……お前方の考へでは、星と此先生様とどちらが強いと思ふ。』

『それは申す迄もなく先生がお強いと思ひます。』と弟子共は、又もや頭を下げました。

『さうであらう。さうなくてはかなはぬ。それでは此先生が、一番仕合ひで乗り出すとしよう。』さう言つた時、弟子の一人で李寶といふのが、膝を進めました。

『先生、只今も一同が申す通り先生に抗ふ程の者では御座りますまい。先づ此拙者が一番出掛けて見まして、罷り違へば、先生の代りに拙者が生首を携げて参りませう』と、力みました。先生と自稱する龍淵も『それがよからう。』と申しました。弟子も又『その方が面白いでせう。』と申しますので、遂々李は獨りで出掛ける事になりました。

二、熊と蟻

福州から道程何百里、浙江を渡つて金陵へ来るまで、三ヶ月もかかりました。愈々金陵へ来て尋ねますと、直ぐ知れましたので李は勢ひ込んで、ドシ〜と星の棲居へ乗込んで参りました。李の心算では、定めし大きな邸に居を構へてゐるのだらうと思つたのですが、これは又意外にも、狭苦しい茅家だつたので、頭から馬鹿にしました。未だ案外なのは、私がソノ星祥だと言つた本人が、見貧らしい老人だつたので、益々侮ごつてかかりました。李は横柄に反り返つて、

「實は先生の龍淵が参る處を、それには及ぶまいと拙者が推參仕つた。早速一手腕較べを致したい」と申入れました。星祥老人は莞爾して、

「左様でござるか、遠路のところ御苦勞でござる。早速お望みに委せて、一手教示に預りませう」と、従順しく答へました。元來この李といふ男は、餘り賢く無い男と見えて、

「ヤッ!!」と掌手を合せて先生のする通り天を睨みますと、成程室の中が次第に



淡暗くなつて、大粒の雨が、軒を鳴らしてバラ〜と落ちて來ました。李は得意さうに、小鼻をビク〜させて、

「如何でござる星祥老人、貴下には此雨を歇ませる事が出来ませうか」出来るなら歇ませて見ると謂はぬばかりの顔をしました。星祥老は沈着き拂つて、

「いや宜しうござる。それではホンノお笑草までに、拙い術をお目にかけてやう」かう言つて、何か口中で呪文を唱へますと、今まで沛然、降つてゐた雨がピツタリと歇み、空はカラリツと霽れ渡りました。李實は内心驚いたが顔には出さず、

「お手の内感服仕つた。それでは如何でござる」と前と同様掌を合せて天を睨みます。俄かに轟々と地響きがして、あれ〜と言ふ間に、家は前後左右

に、ガタ〜と揺れ初めました。今度は老人、李の自慢をせぬ中に、呪文を唱へて、ピツタリと地震を止めて了ひました。李は、自慢の機を奪はれて大變に怒り、忽ち大きな熊になつて、老人に喰つてかかりました。すると老人は一匹の蟻



となつて、熊の毛の中に潜り込み、嫌といふ程血を喫ひました。李の熊は、大變苦しがつて、遂に表の方へ逃げ出しました。その時老人は何時の間にか蜂になつて、元の室へ歸り本體に返つて、煙草を喫つてゐました。

三、術較べ

熊に化けた李はどん／＼と逃げ出して街外れまで來ると、漸と後を振り返り乍らこれも本體に返つて、びつしより濡れた汗を拭ひました。が、今蟻に喫はれた首筋は、ぶく／＼と腫れ上つて、痛んで堪りません。李は這々の體で、福州さして逃げて歸りました。

福州では、『この先生』の龍淵が、首尾は何うかと、首を長くして待つてゐましたが、今李が反對に酷い目に逢つて歸つたのを見ますと、大そう立腹しました。そして、弟子の止めるのも肯かず、此儘に打捨て、置いては、愈々人の物笑ひだ。

と、齒齧みをして飛出しました。

龍淵が南京の街へ這入りますと、もう大變な評判です。

何うです。まア、此間來た李とか何とかいふ者は、小生意氣に星祥先生と術較べだなど、遙々福州くんだりから出掛けて來て、酷い目に逢つて歸つたさうぢアありませんか。』

『ほんとうに何といふ馬鹿者でせう。盲目蛇物に怯ず生兵法大怪我のもととはよく言つたもの、一體そんな弟子を持つた先生の顔が見て遣りたうございます。』
『左様々々、大方馬鹿の先生ならウス呆けてござりませう。定めし變つた顔をして居りませうが、その顔が見たうござりますなア。』

傍に聞いてゐた龍淵先生は眞つ赤になつて怒りました。そして這麼ことを言はせるのも仍且星祥の所業に相違ない。憎い奴だと、ごし／＼路を急ぎました。
と、ある曲り角まで來ますと、向から油壺を携げた老爺が、ヒョ／＼とやつ





て来ました。龍淵は腹立ちまぎれにその老爺の肩を掴んで、

「これ老爺!! 貴様星祥といふ糞爺を知つてゐるか」と怒鳴りました。すると老爺はキヨロンとして、

「ははア星祥を尋ねなさる……そして、一體貴下は何誰でござります。と反問しました。

龍淵は焦慮つて、

「俺は福州の龍淵といふ偉い先生だ。」と申しました。老人は澄し込んで、

「ハハアお前さんが龍淵かい。ハハアさうかい。なるほど、福州の龍淵と稱ふ人はもつと偉い人かと思ふたに、これは扱、聞きしに優る大馬鹿だ。私はソノお前さんの今尋ねてゐなさる星祥でござる。」

星祥と聞いて、龍淵は、急に猛り立ち、

「己れ!! これを見よ。」と例の術を使ひますと、地面がバツと大口を開いたやう



に眞つ二つに割けました。星祥老人、危ふく地下に墜ちたかと思ふと、これ又咒文を唱へると一緒に、老人の姿は見る／＼一片の雲となつて、中空へスイと昇つて行きました。

第一の術に失敗した龍淵は、更に手を變へて、今度は一團の嵐となり、颯と星祥の雲を吹き散らしにかゝりましたところが、星祥老人それと知つた一つの鐵丸となり、眞つ直に地上に落ちました。龍淵これを見ると、今度は猛火となり、鐵丸の周圍に燃え熾つて、溶かさうとしました。その時俄に雷鳴劇しく雨は車軸を流さんばかりに降出したのであります。

四、兄弟分

雨の爲めに、さしもの猛火も、瞬く中に消へたのですが、その時鐵の丸は早何處へ失せたか、無くなつてゐます。龍淵は、雨にビツシヨリ濡れて雷を睨み「や



つ!!』と氣合をかけると、見る／＼恐ろしい龍と變じ雷雨を縫ふて、空を駛せ昇つて行きます。すると、何うでせう。今まで篠を亂して降つてゐた大雨が、歇んで、日がカン／＼と照つたのです。これには、龍に化けた龍淵も驚いたでせう。黒雲が鎖ち籠めてゐてこそ龍も張合ひがあるが、日に照されては堪りません。途中で一羽の雀となつて、飛で下りました。と、つい傍で、

『何うでござる、最早降參でござるか』と星祥の聲がしますので、龍淵の雀が振り向いて見ますと、大きな三毛猫が、毛を逆立て、睨んで居ります。龍淵大いに困つて、狗にならうとした刹那忽ち、飛か／＼つて、ガツシリと雀を咬へて了ひました。雀の龍淵は苦しくて耐りません。頻りと術を戻さうと藻搔いたのですが、何分猫の口の中ですから、術は戻りません。遂々星祥の猫に噛み殺されて了ひました。

星祥は、龍の死んだのを見て、本體に返りました。龍も又死體のまゝ本體に返りました。大勢の人々は、この時、星祥の周圍に集つて、手を打つて賞め讃へました。併し星祥老人は尠しも喜びませんでした。老人は群集に向つてかう申しました。

『皆さん、私は殺生をする爲めに仙術を覺えたのではありません。龍淵も決して悪い事をする爲めに術を習つたのではなく、一時の出來心でかうした姿になつたのです。私は人を生かす事を知つてゐます。私の術はそれが奥義なんです。皆さん御覽下さい』かう言つて咒文を唱へました。實際そんな事が出来るものか、と見てゐますと、龍淵の死骸がムク／＼と動いて、忽ち元の生きた龍淵になりました。龍淵はもう全く降參して星祥老人に謝罪りました。星祥も喜んで、これを許し、二人は此處で兄弟の契りを結びました。



衛周祚と小人

後には大臣にまで出世した山西の衛周祚が、まだ貧しい一受験生だった時のことでした。

その頃、衛周祚は汚ない寺院の離れ座敷を借りて、戸部省の役人になりたいと一生懸命に勉強してゐました。

ところが丁度、春先のことなので、蚤や蚊や蠅などが澤山ゐるのでした。

『ああ、搔い……』

衛周祚は読みかけてゐた『考經』を机に伏せて、芭蕉の葉で作つた團扇を手にしました。

追ひ拂つても、追ひ拂つても、蚤や蚊や蠅などは、幾ら追ひ拂つても、物の譬へにもある通り、また、直ぐうるさくたかつて來るでした。

『こんなことで、大切な時間を無駄にしてはつまらない。』

やがて衛周祚は、氣を取り直して書物に向ひました『身體髮膚これを父母にうく、敢へて毀傷せざるは孝の始めなり、それ孝は徳の本なり、教へのよりて生ずる所なり、身を立て道を行ひ名を後世に揚げて、以て父母を顯はすは幸の終りなり。』

蚤や蚊や蠅などは、衛周祚が勉強家なのをいゝことにしてますます激しく攻め寄せるのでした。

『とてもこれではたまらない……』

さすが勉強家の衛周祚も遂に『考經』を投げ出して了しました。
『もつと綺麗な部屋を借りたいのだが、今の僕にはお金がない……と。それかと



云つてこゝに居ては、少しも勉強が出来ない……し、あゝ、困つたなア。』
そして腹立たしそうにかう呟きながら、何気なしに庭先の花などを眺めました。
と、不思議なものが瞳に止まりました。

それは、何處から現れたのか軀の高さが二寸ばかりしかない、馬に乗つた小さな武士でした。

勿論、馬の大きさも、僅かにその小人を載せるだけでした。

小武士は鷹を臂に止まらせてゐました。

その鷹もまるで蠅ぐらひの大きさでした。

二

『これは變なものが来たぞ！』

衛周祚は我を忘れて、その小人を見詰めてゐました。



小武士は庭石から座敷に飛び上つて、室内をぐるぐる廻りながら、走つたりはねたりするのでした。

その大きさは前と同じですが、今度は腰に小弓矢を帯び、馬に乗らないで獵犬を曳いてゐました。

獵犬の大きさは蟻くらゐでした。

間もなく同じやうな小人が、馬に乗つたり、歩いたりしながら、ゾロゾロと集つて来ました。

見る／＼うちにその数は百人位になりました。

『何をするつもりなのだらう？』

尙も衛周祚は息を秘そませて、小人どもの動作を見詰めてをりました。

小人どもは犬の頸紐をほごきはじめました。

自由の自體となつた數十匹の犬は、一勢にぞつと駆け出しました。



突如、四方は勇ましい獵場と化したのでした。

小犬どもは、机に上つたり、壁に沿つたりして蚊や南京虫を嗅ぎ出しました。

埃と一緒に蚊が逃げようとする、小人どもは鷹を放つてこれを搏ち、もし、

蠅のやうに大きなものが飛び出すと、小弓でもつて射殺して了ふのでした。

また、く間に、今まで衛周祚の勉強をさまたげてゐた蟲どもは、狩り平らげられたのでした。

この時、頭上に平天冠を戴き錦襪の服を着た小人の王様が、黒塗の小馬車に乗つて驅けて來ました。

三

小人どもは皆な拜伏して、王様の前に蚤や蚊や蠅などの獲者を捧げました。

そして、衛周祚の方を指さしながら、何かしきりに言上するのでした。

だが、その聲が餘り小さいので、衛周祚には、さつぱり意味が分らないのでした。

暫らくすると、小人どもは隊をととのつて、衛周祚の方へ進み寄つて來ました。

『おや、おや。』

仕方がないので衛周祚は、居眼りをした風をして少しも身體を動かさないで、

じつと様子を窺つてをりました。

すると小人どもは、衛周祚の身體に這ひ上つて、又も着物の縫目などから、蚤を見つけて出して殺すのでした。

『さア、これでいゝ……と。』

『もう勉強の邪魔にはならなからう。』

『随分と居たね。蚤ばかりでも、五十匹ではきかないかも知らないせ。』
衛周祚の肩を歩きつゝ、こんなことを話し合つてゐる小人もありました。





やがて、王様は號令をかけながら、小馬車の中へはいりました。すると澤山な小武士どもも、鷹や犬やを集めて、歸り仕度をはじめました。馬蹄の響と小人の足音とは、まるで小豆を撒くやうでした。そして見る／＼うちに、霧の如く、煙の如く、迹方もなく消え去つて了ひました。

あつけに取られてゐた衛周祚は、夢ではないかと、耳をつねつて見た位でした。

四

衛周祚は、更めて、座敷内を見廻しました。

よく／＼調べて見ますと、一匹の小犬が椅子の下に残されてゐました。

「しめた！」

大いに喜んだ衛周祚は、その小犬を捉らへて、机の上にのせました。



「それ、御馳走だよ。」

飯粒の残りを與へますと、ちよつとその匂ひを嗅いて、べろりと喰べて尾を振りしました。

衛周祚はこの小犬を、硯函のなかに飼ふことになりました。

そして投げ出した『孝經』を取り上げて、机に向ひました。

小人どもの助けによつて、蚤や蚊や蠅などから、苦しめられるのを免がれた衛周祚は、思ふがまゝに勉強することが出来ました。

一日衛周祚は、晝寝をしてゐました。

すつかり馴れきつた小犬は、衛周祚の側に居て、何時もの通り蚤や蚊の番をしてゐました。が、突然に寢返りを打たれたので、可哀想に、壓しつぶされて了ひました。それと氣付いた衛周祚は、驚いて起き上つて介抱しましたが、何分にも蟻ほどの小犬のことですから、間もなく息は絶えたのでした。

古戦場の夜



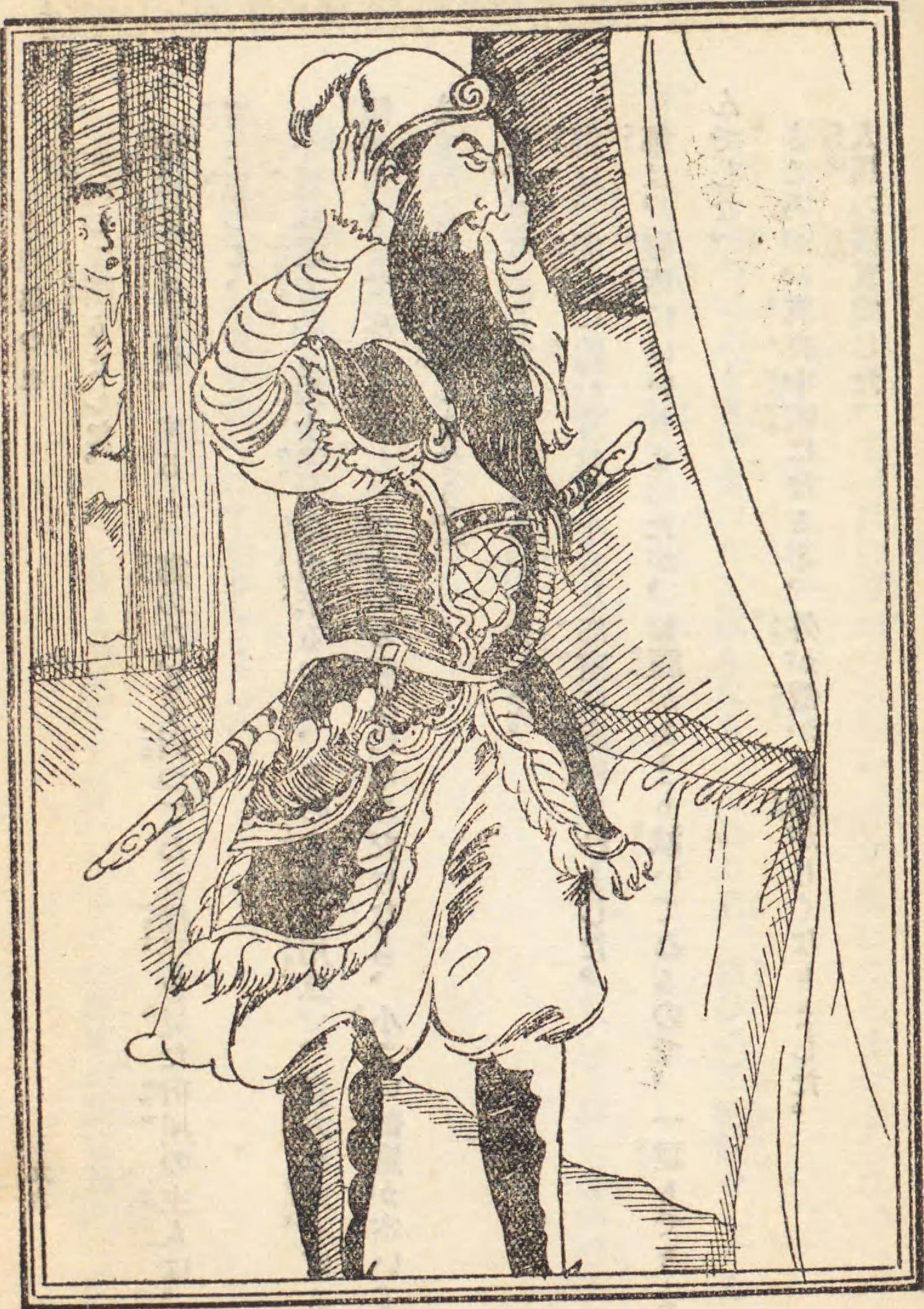
鉛色の雲が北の方から吹いて来て、見る見る夕暮の空いつばいに擴がりました。『これは雨になる。この野原で雨に降られてはたまらない。早く宿屋に泊らう。』
險悪になつた空模様を眺めながら、旅商人の鄭は道を急ぎました。そして、灯がついたばかりの宿屋を見付けて、飛びこみました。

鄭は、お腹が減いて堪らないので、

『夕飯を早く用意して下さい。』

と宿屋の番頭に云ひました。ところが、番頭は、

『お氣毒でムいりますが、今晚は他にお客様がムいますので、もう夕飯の用意はできません。』



と云つて断りました。

鄭は困りました。すると、鄭のひごく困つてゐる様子を見た宿屋の主人は、氣毒に思つて、

『今晚は遠方から兵士達が澤山來るので、その食事の用意で、貴方に差上げる夕飯がありません。しかし、貴方がお寢みになるだけなら、小さい部屋が空いてゐますから、御案内しませう。』

と云ひながら老人は立ちあがりました。

鄭は、老人に連れられて小さな部屋に案内されました。

鄭は、寢床にはいりましたが、お腹があまり減いてゐるので、一睡もできませんでした。

ところが、真夜中頃になると、外が俄かに騒がしくなりました。

人馬の騒ぎでした。

鄭は、不思議に思つて、戸の隙間から覗いて見て驚いてしまひました。

宿屋の中は、兵士達でいっぱいでした。

土間に座つてゐる者、食べたり飲んだりしてゐる者、戦ひの手柄話をしてゐる者、それは大へんな騒ぎでありました。

鄭は何事が起つたのだらうと、不思議に思つて、息をこらして兵士達の様子をみてゐますと、やがて、兵士達は口々に、

『將軍がおいでになつたぞ。』

と叫びました。

遠くの方から蹄聲が憂々とひびいて來ました。

兵士達は、將軍を迎へてでゆきました。

外は行列の澤山な提燈の灯で、晝のやうな明るさでした。

行列の真中には、漆黒の髭を胸まで垂らしたいかめしい將軍が馬に悠然と乗つ

てゐました。

將軍は、馬から下りて宿屋にはいつて、食臺の上席に腰を卸しました。

宿屋の亭主は、恐るゝ將軍の前に食物や酒を運びました。

將軍は舌鼓をうつて食事をしました。そして、將軍が食事をすましてしまふと、

士官達はいつて來ました。

『君達はもう暫らくあちらへいつてゐてくれ給へ。わしはもう少し休んでをる。

進撃までにはまだ間がある。』

と將軍は云ひました。

士官達は將軍に一禮してでてゆきました。

『陳士官を呼んでくれ。』

將軍は、亭主に云ひつけました。すると、亭主といれちがひに、若い士官がは

いつて來ました。

そして、陳士官は、長髯の將軍を、左手の戸口から次の部室に案内しました。

戸口の隙間からランプの光が洩れてゐました。

鄭は、そつと部室をぬけだして、戸の隙間から覗きこみました。

部室の中には、竹の寢臺があつて、ランプが土間に置いてありました。

長髯の將軍は、何をするかと見てゐると、両手で頭を抱えてぐつと、上へひき

あげると、あら不思議、頭はすゝつと抜けました。

將軍は、自分の頭を両手で抱えて寢臺の上に置きました。

すると今度は、陳士官が將軍の兩腕をすゝつとすゝつと抜きとつて、頭の側にそ

つと置きました。

手なし頭なしの將軍は、寢臺の上に横はりました。

と今度は、陳士官は、將軍の兩足をかはるがはる抜きとつて、土間に置きました。

た。



ランプは、このとたん消えました。
鄭は、餘りの恐ろしさに顔を眞青にして、部室へ逃げて歸つて、夜着を頭から
スツポリかぶつて、夜明けまでガタ／＼ふるへてゐました。
鶏が遠くの方で鳴きました。
鄭は、夜着から顔をだしました。
夜は、ほの／＼明けかけてゐました。
鄭は、身のまわりを見廻して、アツと驚きました。
驚いた筈で、鄭は茫々とした草原に寝てゐました。
鄭は、夜明けの寒さと恐ろしさにふる／＼ながら馳けだしました。三里
ばかり夢中に走つて鄭は、とある宿屋に着いて戸を破れるやうに叩きました。
宿屋の亭主は、寢呆眼をこすりながら戸を開けて、彼があまり朝早く宿屋に來
たことを驚いて、

「一體こんなに早くどうしたのです。」

と尋ねました。

そこで鄭は昨夜の恐ろしい出来事を話しました。
が、亭主は驚いた顔付もせず、

「あゝさうですか。この近所はたいてい古戦場でしてネ、暗い晩などには、貴方が
ご覧になつたやうな不思議は、度々ありますよ。」と話しました。



馬鹿の老韓さん

或る谷間の一軒家に、馬鹿の老韓さんと云ふ子供が居りました。

「家の老韓にも、本當に馬鹿で困つて了ふ」と、云ふ父さんや母さんのお話をし居るのを、蔭で聞いて居る老韓は、什麼かして伶俐になりたいと、思つて居りましたが、どうしたならば、母さんや父さんから褒められる伶俐者になれるのかそれが分りませんでした。

その日も、母さんは、老韓を側近くへ呼んで、

「老韓や、お前は少し、向ふ村に住んで居る王二さんを見習ひなさい。王二さんはお前から見ると、年が二つも下であるに、毎日々々お父さんの手助けをして、山へ木の實を拾ひに行つたり、河へお魚を探りに行つて居りますよ。お前もどう

か王二さんのやうになつてお呉れ」と、ボカンと口を開けて、母さんのおつ仰ることを、不思議さうに聞いてゐる老韓の面を、情なさうに見ながら言ひました。

そこで 老韓は考へました。

「今日はこれから、木の實を拾ひに行つて、母さんや父さんを驚して呉れやう」と背中籠を負いて、裏の山へと上りました。家が見えなくなる程遠い所へ行くと、歸る事が出さなくなるので、ほんの家の近所を探し廻つて居りました。

それでも、背中の籠が重くなつたので、今日こそは、母さんから褒められるぞと、ぞくぞくする嬉しさに、胸を躍らせながら歸つて來ました。

「まア、お前の拾つて來た木の實は喰べられないの許りではありませんか、本當にお前のお馬鹿さんにも困つて了ふネ」と、母さんは、老韓の籠にある木の實を見ると、褒める所ですか、這麼な風に言ひました。

これを聞いて、大層がつかりしましたが、また氣を取り直して、



「それでは、お魚を探つてきて、父さんから褒めて戴かう」と、此度は釣竿を手にして家の近くの河岸へと、下りて行きました。

老韓は、河岸の石に腰を下して、糸を垂れ熱心に水面の浮標の動くのを、ヂツと見つめて居りました。が幾ら経つても、浮標はビクリとも水の中へ入りませんでした。

「什麼したのだらうか」と、何度も何度も氣にして、釣糸を引き揚げては見ましたが、陽光にキラ〜と、魚釣が輝いて居るだけで、柳の葉程の魚もついて居りません。

それから、二時間、三時間も、日の暮れる時分まで、糸を垂れて居りました。が、目高一匹も釣れませんでした。

老韓は、つく〜と魚を釣る事が飽きあきして、泣きさうな面をして、釣竿を肩にして家へ戻つてまゐりました。

「おや〜、お前は餌をつけないで、魚を釣らうとして居たのかい。それでは一年が二年、一生涯でも魚は釣れはしないよ。本當にお前のお馬鹿さんにも困つて了ふナ」と、父さんも又、這麼におつ仰ひました。

老韓は、山へ行つて、木の實を拾ふことも、河へ行つて、魚を釣ることももう嫌になつて了ひました。

或る日のこと、

老韓は、家の前へ出て、出きるだけの大きな聲をして、たつた一ツ覺えてゐる歌を唄ひ始めました。

春が来た、春が来た。

花にひら〜、蝶が舞ひ

柳の糸に、燕飛ぶ……

すると、直ぐ向ふの方の山からも、老韓の聲に眞似して、同じやうに





馬鹿の老韓さん

春が来た、春が来た。

花にひら〜、蝶が舞ひ

柳の糸に、燕飛ぶ……

と、唄つて居ります。

老韓は、これを聞くと、大層腹を立てました、もつと大きな聲で

「お前は誰だ？」と、怒鳴りました。

すると、直ぐ山の向ふでも、同じやうな大きな聲で、

「お前は誰だ？」と、怒鳴り返しました。

これを聞くと、なほ〜馬鹿にされて居るやうで、腹が立つて〜耐りませんので

「お前は馬鹿さんですネ」と、言つて遣ります、と向ふでも直ぐに

「お前は馬鹿さんですネ」と、言ひ返しました。



「お前は馬鹿三太郎だ」と、力一杯に罵ると、向ふでも力一杯に、

「お前は馬鹿三太郎だ」と、罵り返しました。

老韓は、腹の立つのと、口惜しいので、悲しくなり、家へ泣いて歸りました。

「まア、お前は什麼おしなの？」と、母さんが訊ねましたので、今までのことを全然とお話をしました。

「お前も本當にお馬鹿さんですネ」と、母さんはまた言つてから「それは山びこと言つて、お前が大きな聲を出すと、向ふの山へ響いて、外の人が眞似でもして居るやうに、聞えてくるのです。お前が其様な悪口をいふから、向ふからも悪口を云ふやうに聞えるのですこれからはもう其様な憎れ口をきかずに褒めて御覽なさい屹度向ふでもお前を褒めてくれますから……」と、詳しく話して下さいました。

それから二三日後のことでした。

馬鹿の老韓さん



向ふ村に住んで居る王二と云ふお友達が遊びに来まして、その歸りがけに、
「老韓さん、君は明日、僕の家へ遊びに来ませんか」と、訊ねました。

「だって、僕は遊びに行けないものと、老韓は氣まり悪さうに言ひました。

「什麼して？」王二は眼を圓く見張つて居ります。

「君の家が分らないから」と、澁々と答へました。

「僕の家は、向ふ村へくれば、直ぐに分りますよ」と、王二は笑ひながら、

「では老韓さん、明日は遊びに行らつしやいネ」と、念を押しました。

「でも……僕は……君の村まで行けないのです」

「えッ」と、王二は這麼な近い所へ來ることが出きないのかしらと、老韓さんの

餘りなお馬鹿さんに吃驚して、眼をグリグリやりながら「それでは慙ふませう。

僕が今日、歸りがけに、お家から僕の家まで、道々にず——と、藁灰を溢して行



きますから、君が明日來る時に、その道端の灰に附いてくると、屹度間違ひなく、
僕の家へ來られませうよ」

「あゝ、さうだ」と、老韓も思はず、手を打つて、喜びながら「では明日は遊びに
行ませう。」

そこで、仲のよい二人は別れて、王二は向ふ村へ歸つて行きました。そして道
々、約束をした通り、藁灰をバラ〜と撒きながら、

明る日になりました。

老韓は、始めて向ふ村の王二の家へ遊びに行くので、楽しくて〜、昨夕は床
に入つて、夢にまで王二と面白く遊んで居ることを見ました。

父さんや母さんも、何時も家に許り居る老韓が、今日は珍しくも向ふ村へ遊び
に行くと言ふので、大變に吃驚なされたのでしたが、いろ〜のお菓子やお辨當
までも作へて呉れました。



馬鹿の老韓さん

110

老韓は元氣よく家を出かけまして、道端の藁灰を頼りに、向ふ村へと、それに附いて行きました。

その途中で、急に激しい風が吹いて來まして、道に撒いてある藁灰が、さつと風と共に、側を流れて居る河の中に吹き飛ばされました。

老韓は、そこまで來て見ると、藁灰が河の中に浮いて居りますので、岸に下り段々と河の中へと入つて行きました。

河の深さは、腰から胸となつたので耐らなくなつた老韓は、河の中央に突ッ立つたまままで、途方にくれて大聲で泣いて居りました。

旋風に攫はれた少女

支那長安の街はづれに、昔、慶雲寺と云ふ荒れ寺がありました、ペン／＼草が生えた境内には高い塔がいくつもいくつも、建つてゐました。そして塔の頂きには小さい部室がありました、極く僅かな人より他に部室のあるのを知る者はありませんでした。

慶雲寺の附近に翠々と呼ぶ白蓮のやうに美しい少女が住んでゐました。

或る夏の蒸し暑い日のことでした。翠々は庭にで、泉水の邊で涼んでゐますと、突然、風もないのにつむじ風が颯つと吹き起つて、アツと思ふ間もなく、翠々を空へ高く巻きあげて行つてしまひました。

ところが翠々はやがてフワリト身體が地に着いたのでハツと思つて、目を開い

旋風に攫はれた少女の話

111



て四邊をキヨロく不思議さうに見廻しました。とまあ驚いたことには翠々が立つてゐるところは慶雲寺の塔の天つべんで、その上、翠々を驚かしたことは、學生服を着た美しい若者がすーつとそばに立つてゐたことでした。

『まあ、貴方は誰方なのです。』

翠々が驚きの聲を挙げますと、若者は優しい聲で、

『さう驚きになつてはいけません。これは全く天の御引合せです。よくまあお目にかゝれました。どうかお願ひですから、私の嫁になつて下さいませんか。もし、貴方が私のお嫁になつて下さつたら二人はどんなに幸福になることでしょうか。』

と云ひました。

『まあ、飛んでもないことを仰有ます。』

翠々は白い美しい顔を眞赤に染めて俯向きました。

『では、おきつ入れ下さらぬのですネ。どうかお願ひですからもう一度考へ直してみして下さい。もしも貴方がどうあつても私の嫁になるのがお厭でしたら、お氣の毒ですが、貴方は一生涯この塔から離れることはできませんよ。』

若者は云ひました。

翠々は驚きと恐ろしさと恥しさが胸にこみあげて言葉もなく黙つてゐますと、

若者はやがてパンやお酒などを運んで来て、何處かへで、行つてしまひました。

若者はその後毎日夕方になると姿を現はして、翠々に向つて、

『お嫁になつてくれますか。』

とうるさく尋ねるのでしたが、翠々はその度に、

『お断り致します。』

と若者の願ひを退けました。

若者は外へで、行く時はいつも塔の入口を大石で蓋をし塔へ登る階段をばづし



ていきましたので、翠々は恐ろしい塔の部室から逃げだすことはできませんでした。

ところが、若者は部室に姿を現はす時はいつもパンやお酒の他に、紅や白粉や美しい着物やいろ／＼な寶石などを持つて来て、翠々にくれたのでした。そして又或る時、若者は大きな紅玉をもつて来たので、塔の上は夜でも晝のやうに明るく輝くやうになりました。

翠々はかうした若者の心づくしを嬉しく思つてゐるのですが、若者のお嫁になる氣にはどうしてもなれませんでした。或る日のことでした。

若者は窓に鍵をかけるのを忘れて外へでゝ行きました。翠々は何氣なく窓から外を見てアツと驚きの聲を擧げました。驚いた筈で、美しい若者と思つてゐたのが、恐ろしい人食鬼の姿になつて、髪は茜草のやう



に眞赤で目玉は石炭のやうに黒く口は血を塗つた盆のやうで唇からは眞白い牙がニヨキリ生え肩には鶯色の翼が食付いてゐました。

『まゝあ恐ろしい。』

ブル／＼ふるへながら翠々が見てゐますと若者は翼を擧げて、パツと地面へ飛降りました。すると、あら不思議、地面につくと人食鬼の姿は元の美しい若者になつてしまひました。

『あゝ怖い。』

翠々はそれを見ると急に恐ろしくなつて、ワツと聲を擧げて泣きだしました。翠々は目を眞赤に泣き膨しながら窓から首をだして、塔の下を見てゐますと、その時でうご、塔の下を散歩の人が通るところでした。

翠々は大聲をだして助けを求めましたが、塔が高いので、聲は下まで届きませんでした。

そこで翠々は次に、手を振り動かして合圖をしましたが、散歩の人は氣がつかぬのか見上げませんでした。

「あゝ、何か好い工夫はないか知ら。」

翠々はいろ／＼考へてみた末、たうとう着物をぬいで、バツと地面へ投げ下しました。

着物はヒラ／＼宙を舞つて落ちていきました。

散歩の人は、突然、目の前へバサリ着物が天から落ちて來たので、吃驚して見上げました。すると、塔の上には小さい人影が見えました。

人影は少女らしいのですが、誰だかはつきり分りませんので散歩の人は永い間塔を見上げて考へてゐましたが、やがて何か思ひ當つた様子で、

「あれはお隣の娘さんだ。」

とその人は獨語を云ひました。

「つむじ風にひきさらわれて行かねば、あんな高いところへ女の子がどうして一人で登れるものか。」

そこでその人は、着物をひろつて持つて歸りました。そして翠々の両親に會つて慶雲寺で、見たことを話して、

「この着物は翠々さんでは無いませんか。」

「あゝ、これは翠々のです。ではきつと塔の上にあるのは、あの子です。」

後は涙で両親は着物を抱えて聲をあげて泣き崩れました。

翠々には一人の兄さんがありました。兄さんは力が強く勇敢でその附近の若者は誰も、翠々の兄さんには勝てませんでした。

兄さんは両親から妹の話をきくと直ぐ大きな斧をもつて塔へでかけていきました。

そして慶雲寺の近くまで來ると、ポウ／＼と生ひ茂つた草むらに身を忍ばしま

した。

大陽が沈んで四邊が暗くなると、一人の美しい若者が丘へ登つて來ました。

『來たぞ！』

息を殺して待つてゐますと、若者はバツと人食鬼の姿になつて翼を擴げて飛ぼうとしましたので、

『ウム、畜生、逃がしてなるものか。』

ヒューツと斧は兄さんの手から風を切つて飛びだして、人食鬼にズブリ當りました。

兄さんは斧を投げつけておいてバツと草むらから飛びだして、拳を固めてポカ／＼なぐりました。

『ギャツ、ギャツ。』

人食鬼は赤子の泣き聲のやうな悲鳴をあげて、バタ／＼翼ばたきして逃げだし

ました。

兄さんは喜び勇んで、塔へ馳けつきました。が、どうしても塔の頂きまで登れぬので家へ引き返して近所の人達の手助けを頼みました。そして次の朝、翠々の兄さんは手助けの人達と一緒に慶雲寺へ行つて、梯子をかけて塔の頂きに登つて、妹の翠々を半年ぶりで無事に連れて戻りました。

蠟燭のない國

それは多分千年も二千年もまたはずつと大昔の一萬年も二萬年もの事だつたかも知れません。昔、支那の山奥の或る村に、陳汗遁といふ地主の小旦那がいました。まだ若い上に、家はお金持ちの息でしたから、多少の教育も受けて村でも物知りの方でした。

この陳汗遁が或る年の或る日のこと、遙々と北京をさして京見物に出かけました。毎日々々物珍らしい事や奇體な物などを見物して大變に伶俐な人間になりましたが、さてこれから村へ歸るのに、何を北京土産に買つて行かうかといろいろ考へた末、これは珍らしい重寶な物だと思つて買つたのは蠟燭でありました。

陳汗遁は故里の自分の村へ歸ると、これは京土産だと言つて、一軒前何本づゝ

かの蠟燭を村中の人々に配りました。しかし、陳汗遁はわざと其時には、蠟燭といふものは何にするものだからと云ふ事を誰にも教へませんでした。

そこでサア貰つた、蠟燭のない國の人々は何だかサツパリ分りません。二三日経つと村の日待がありまして、多くの村人が元東坤の家へ集ります。此處で聞いたら分るだらうと皆がノコノコ出懸けて來ました。

「マア龍天瑩さん、チョツクラお前様に尋ねてえ事があるだ。」と一人の若者は、かう年老つた人に訊ねました。「お前様なら大抵知れべえと思ふだ、年嵩でもあるし、それから頭もコツ禿げてるから……。」

「馬鹿野郎何を聞くだ、人に物を尋ねるのに頭の讒訴をする奴があるか。」とお爺さんは、ちよつとムツとしましたが、すぐに氣を直してニコ／＼しながら返事をしました。

「何を訊くだ。」

「うん、外でも無えだが、俺ア此間、名主様の小旦那が京見物をしなすつて、土産だといつてらふそ、ちゆう物を貰つたどがな、お前様のところでも貰つたかね。」

「うむ、俺がところでも貰つた。」

「あれえ、何にするもんだか、俺に分んねえだが教へて貰えてえもんだ。」

「此の馬鹿野郎、呆れ返つて奴だ。」とお爺さんは吃驚りしたやうに目を大きくしました。

「アノ位のものを知んねえで、汝今日お天道様に申譯立つか、呆れ返つた野郎だ、汝人間當分やめろ。」

「人間やめたらおツ死んじまふかね。」

「おツ死んじまへ、世話が無くて可えだ。」

「何だ、俺ばかりぢや無えぞ。」と若者が今度はムツとして言ひました。「村中の者皆な知んねえだ、村の者が皆なおツ死んだら、お前様どうする？」

「俺ばかり生きてる。」

「馬鹿な事云はねえもんだ、何ちうもんだか教えて呉つせえ。」

「教えるも教えねえも無え、そんな事今聞かすとも宜えもんだ、黙つて引込んでろ。」

「そんな事云ふもんでねえ、聞くは一時の恥、聞かぬは末代の恥ちうことを、爺さん、寺の和尚様が言はしやつたから、俺ア恥い忍んで聞くだ。」

「高慢な事を吐すな、何でも宜いから引込でゐろ。」

「引込まねえ、聞かねえうちはどうあつても引込む譯にはいかねえ、え、お爺さん、お前様知つてるんだべえな。」

若者はむきになつてかうお爺さんに迫りました。お爺さんは困りました。實はお爺さんも知らなかつたのです。

「止せ金寶來、年長の者に逆らうなよ。マア龍さん、お前様も年甲斐ない、若い

者に逆らつては駄目だ。』

此時、かう言つて間に這入つたのはこの元東坤といふ百姓でした。

「ヤア元ごんかい、何そのね……。」と龍お爺さんが振向いて言ふのを東坤は遮ぎつて、

「實は龍ごん、俺アもこの年して面目ねえが、やつぱりろうそくちう物何にするだか知らねえだ。』

「何んだ元ごん、お前さんも知んねえのか、む……お前さま、そりや食物だかね。』

龍お爺さんはとうとういゝ加減な事を教へて了ひました。

「ハア、食物つて何だね。』

「是は魚でがす。』

「魚ア。』



「元さんも金さんも吃驚しました。』

「らふそく魚と云つて、北京の人は日に三本や四本位を食ふでがす。』

「だが龍ごん。』

と又金寶來が口を出しました。

「けれど魚にしては鱗も何もねえ。』

「この金め、又口を出すか、引込んでろ。鱗がねえつて此んな谷川で獲れる鯀や山女とは違つて鱗なんぞあるもんか。』

「へえ、何だか魚のやうでねえなア。』

「マア汝黙つてろ。』と今度は元東坤が制しながら、戸棚の中かららふそくを取出してそこへ持つて來ました。そして、

「コレ見させえ、是がお前様魚かのう、わかく綺麗な魚があるもんだ、この尖つてるなア何でがす。』と言ひながら、不思議さうに龍ごんの顔を眺めました。

「是は嘴だ。」龍お爺さんは答へました。

「嘴か、アレ此處に穴がある。」

「是やアお前様尻穴だ。」

「成程尻穴か、どうして食ふだね。」

「さうさ、マア煮ても焼いても食べるが、何しろ、斯んな時に食ふには味噌汁にしたが一番旨かんべえ。」

「さうか。」

「元どん、ところで折角マア今日はお日待で集つて來ただ。序でに蠟燭魚の味噌汁のご馳走したら宜かんべい。」

「ア、宜えとも、ぢや、おい、玉味噌下してな、大鍋へぶちこんで、蠟燭魚で味噌汁つくれえよ、早くしろ、残つたら汝等にも一杯づゝ呼ばしてやる、北京子の食ふ物だ。」

そこで元東坤はかう女房に吩咐けました。

間もなく温い蠟燭汁が出來上りました。

「サア皆さん、遠慮なく食つて呉んろや、ジャ俺アも食ふべえ、サア龍どんや、どうぞ。」

「有難うがす、ぢやマア呼ばれます……何だかハア北京ツ子の食ふ物だと思ふと食はねえうちから咽喉がピーピー鳴いてござる。」

「何だか龍どん、ピカ〜光つた玉が浮いてますが……。」

「それは魚の油だ。」

「さうかア、ごんなもんだか、ぢや俺ア一つ先に吸つて見んべえ……。」と金寶來は一口吸ひ込んだ。……ウム、是は訝しな匂ひするな、オヤ、呑んだら何だか咽喉がヒリヒリするやうな鹽梅だぞ。」

「馬鹿野郎、黙つて食つたら宜かんべえ、恥を知らねえ奴だ、呆れ返つた野郎。」



だ。」

龍ごんは又かう言つて金寶來を叱りました。すると元東坤も一杯吸つて見てお訝しな顔をしながら、

「ハア是がハア旨え物かな、シテ見ると旨え物ちうものは不味いものだなア。」

「馬鹿野郎、お前も言ひやがる、旨えものが不味いちう事があるか。」

すると又金寶來が言ひました。

「ハテ、俺がの椀の中へ蠟燭魚二つ三つ入つてるが、ゑかく細くなつて来た。」

「ハテ瘦せやがつたかな。」

「是は駄目だ。」

「どうした、味が變つたかな。」

龍ごんも變になつてきましたので、今度はかう訊きました。

「皆な齒へ附着らまつた。成程龍ごん、金ごんが云ふ通り何だか變な匂ひがする



ぞ、ア、心持ち悪くなつて来た、成程旨え物は不味いものに違えねえ、之は駄目だ、京ツ子の食ふ物田舎者の口に合はねえ、ア、胸がムカムカして来た……。」

「今日は、御免下せえ。」

龍ごんも、元、金も皆が一同變な顔して蠟燭汁を眺めてゐる時に、かう言つて這入つて来たのは、地主の小旦那、陳汗通でありました。

「ヤア小旦那がござらしやつた。お出でなせえまし……サア此方へ来て下せえまし、丁度宜い所で、實はお前様から京土産に下すつた蠟燭を、味噌汁にして今皆に振舞つたところですが、お前様、一杯如何ですか。」

元東坤はかう言つて慌てながら立上りました。陳汗通は驚きました。

「蠟燭を味噌汁……イヤそんな事誰が指圖した。」

「龍天瑩ごんが教へたでがす。」

「マア龍お爺や、年甲斐もなく馬鹿な事を教へるものでねえ、おい、皆そんな物



食つちやアなんねえ、食物じやアねえぞ。」

「エーッ、食物でねえつて……。」

「是は夜になると灯を點すもんだ。」

「ヒヤア駄目だ、龍爺い奴。灯を點すものを食はせやがつて、腹の中火傷するとなんねえ、煙草でも呑むと、火と火とが合つたら腹の中で火事始まるだ、どうしたら宜えだらう。」

一同は吃驚、泣くやら騒ぐやら大騒ぎが始まつて了ひました。

「仕方がねえ、水へ入れえ、早く〜。」

「それが宜え、首へ繩ア附けて井戸へぶら下がるかな。」

「馬鹿を言ふな、井戸の中へ入つたらおッ死んぢまふぞ。」

「ぢやア鎮守様の池へ行くべえ。」

「さうだ〜、それが宜え」



一同總立ちになつて、ドヤ〜と鎮守様の森を目蒐けて駈けつけて行きま

した。
村の人々は何事が起つたのかと、これもドヤ〜と後からついて駈けつけて行きますと、森の側の池の中へ、皆がポカ〜と跳び込んで了ひました。暫らくすると首だけ水の上に出した金寶來、元東坤を見ながら、

「ア、えれえ物を食はされて大變な事になつちまつた。併し、かうして水に這入つておけば、さつき食つた蠟燭も火を出す氣遣えはあるめえ。」

「ア、大丈夫だんべえ、火の要心、々々。」

村の人々は唯呆氣にとられて見ておりました。

人間の皮

一

昔支那に伍陳といふ男がありました、ある朝のこと、いつもの通り何気なく雨戸をあけると一人の少女が、大きな荷物を背負つて、さも疲れたらしく、重さうに足を運んで來ました。

まだ夜もあけきらない程朝早かつたので、伍陳は變に思つて少女に訊ねました。

「何處へ行くんです？ こんなに早く。」

すると少女は返辭の代りに、しくしくと泣き出しました。

「えつ？ ほんとに何うしたんです？ 何が哀しいんです。」



やうやく少女は、涙の一ぱいたまつた瞳で昵と伍陳を見あげながら、

「わたしは綠澤のものなんですけれど、慾深なお父さんお母さんが、わたしをずつと遠い國のお金持ちに、召使ひに賣つてしまつたんです。ところが、仲間の方がわたしが餘り主人から可愛がられるといふので、ねたんで意地めてばかりゐるんです。で、わたしは、とうとうたまらなくなつて、やつとの思ひで逃げ出して此處まで來たところなのです。」

情深い伍陳はすつかり同情して、

「ではこれから綠澤へ歸るのですか？」

「いゝえ、うちへ歸ればお母あさんは繼母ですから、又どんなに叱られるか分かりません——さうかといつて何處へ行かうといふあてもなし……」

少女はかういつて、涙をはらはらと落して泣きました。

「それはまあ可哀さうに——ではとに角、私のうちへおはいり、話は、それから



にしませう。』

と、伍陳は少女を家へ連れてかへりました。そこへ伍陳の妻も出て来て、いろくんと慰さめたので、少女は一先づ伍陳の許に厄介になることになりました。

それから二三日たつたある日のこと、用があつて近くの町へ行く途中、伍陳は町の門の傍に蹲つた易者から呼びとめられました。

「若し、若し！」

「私ですか？」

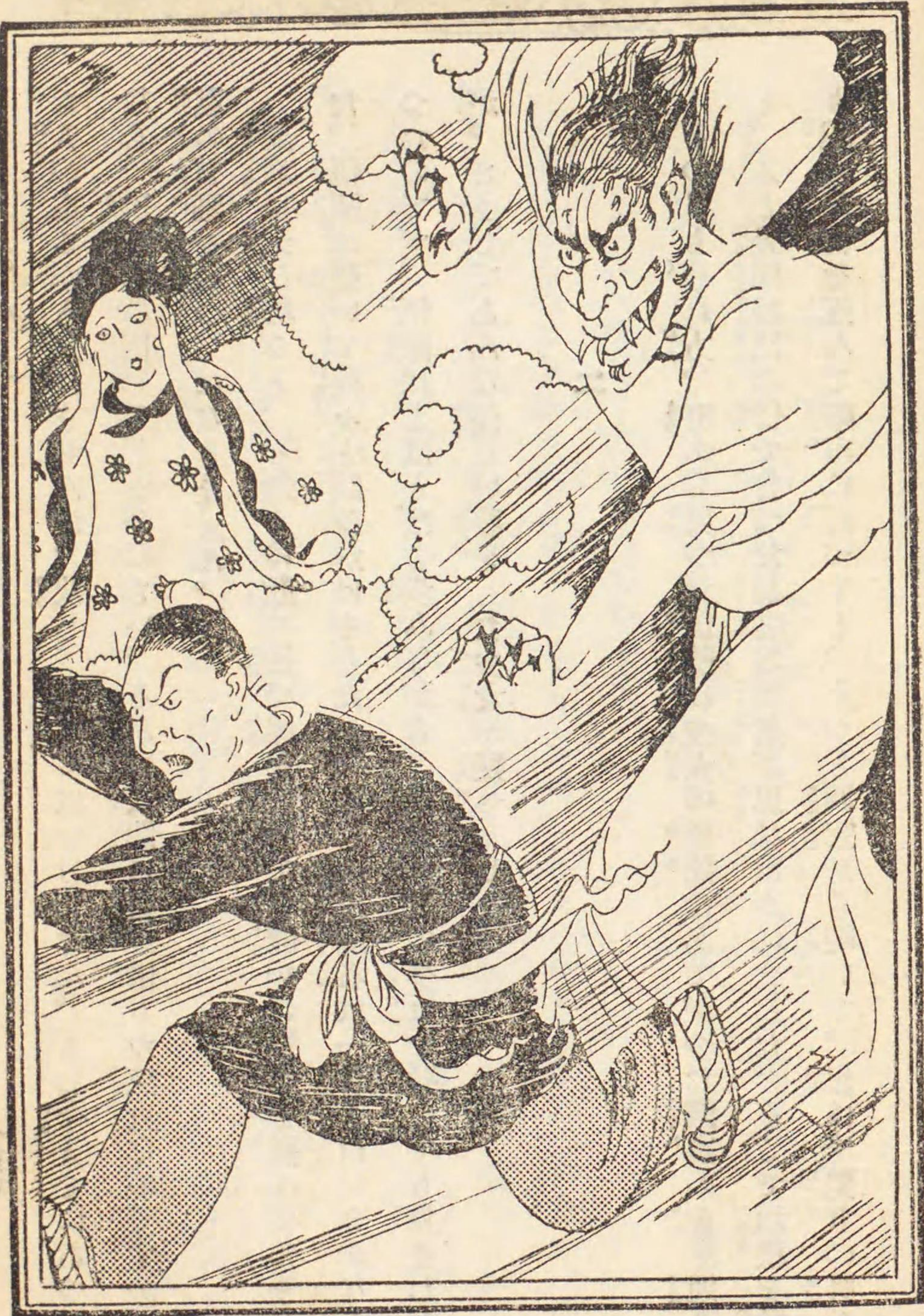
「え、——」

「何の用ですか？」

「あぶない、あぶない！ あなたの身には今危険が迫つてゐるのです。」

「えつ！ どうして？」

「あなたの顔に、ありありと死相が見えてゐます。あなたの家へ二三日中に訪ね





る人があるかも知れませんが、決して寄せてはいけません。もし今までにあつたなら、早速追ひ出してしまひなさい。それは人間に姿を借りた悪鬼なのですから私の言葉を疑つてはなりません。』

易者は云ひ終ると、そ知らぬ顔で傍で脇を向いて、靜かに笹竹を揉んでゐました。伍陳は驚いて種々と問ひかけましたが、それ以上易者は一言も口をきかなかつたのです。伍陳はとぼとぼと歩みながら、一時は例の少女を疑つても見ましたが、どうしてあんな優しい姿をした少女が疑へませう。

二

その日も暮れ方、町から戻つた伍陳は少女の居間にあてがつた離室の前を通ると、ふと晝間城門の傍で會つた易者の言葉が思ひ出されました。そこで垣根を乗り越え足音を忍んで離室に近づく、そつと圓窓から覗いて、思はず驚きの叫び

をあげるところでした。

みれば部屋の中には、顔の色が木の葉のやうに青く、耳まで裂けた口には、鋭い亂ぐい齒が一ぱいにはえた鬼が、人間の形をした皮を机の上に擴げて、剝げかゝつたところへ繪具で色を塗つてゐます。

伍陳は恐ろしさを堪へ眠と見てゐると、戸外に見る人ありとも知らぬ鬼は、やがてその人間の皮を執りあげて、埃でも拂ふやうに二三度バタバタと振つてから外套を着るやうにふわりとからだにかけると、たつた今までの恐ろしい姿は消えて、いつもの美しい少女となりました。

伍陳はびつくりして又もや町へ駆け戻つて今歸らうとしてゐる易者を見つけたと、さき程の無禮を詫び、是非悪鬼退治の知恵を貸していただきたいと頼みました。易者は一本の拂子を伍陳に渡しながら、それを自分の部屋の入口に掛けて置くやうに教えました。





喜んだ伍陳は、家に歸ると妻にもその話をして、易者に云はれた通り、拂子を部屋の入口にかけて、二人は恐ろしさに慄えてゐました。

間もなく離室から出て来た少女は、その拂子を見ると齒を噛みならして怒つてゐたが、突然拂子を噛みくだけ、部屋の中へ躍り込んで逃げ惑ふ伍陳にとびかかり、その胸を喰ひ破り心臓を抉り出すと、それを持つて何處ともなく行つてしまひました。

三

翌朝になつたので、伍陳の妻は弟を町の易者の許まで、走らせて、そのことを話させました。

早速、弟と馳せつけた易者は、暫く大地に耳をあて、ゐたが小首をかしけて、「遠くまで逃げた様子はない。門の前の家は誰のうちですか？」と、伍陳の弟に

訊ねました。

伍陳の弟が、

「それは私の家です。」と、答へると、易者は急に眼の色を變て、

「あなたの家？ それは大變だ。悪鬼は今あなたの家にゐるのです。今朝早く誰か来はしませんでしたか。」と、いひました。弟は、

「昨夜からこちらにゐるので知りません。」

そこで伍陳の弟は妻を呼んで訊ねると、今朝一人の老婆が門前に倒れてゐたから、家へ連れこんで寝かせてあることが分りました。

「それに相違ない——」と、易者はすぐさまとんで行つて、庭のまん中に突つ立つて怒鳴りました。

「人間に化けた悪鬼！ 出て失せろ！」

その聲をき、つけると、奥座敷に寝てゐた老婆は、顔色を變へて裏門から逃げ



出さうとしたが、それとみた易者は、いきなり持つてゐたあかざの杖で叩き倒してしまひました。それと同時に、かぶつてゐた人間の皮はするりと剥けて、老婆は見るも恐ろしい鬼の姿に返りました。

易者が尙も呪文を唱へながら打ちつゞけると、悪鬼は一聲高く呻いて、遂に濃い青い煙になつてしまひました。易者は急いで腰から大きな瓢箪をとつて、煙を皆んなその中へ吸ひこませると、口をしつかと蛙の膏で封じました。

やがてのことに易者は、落ちてゐた人間の皮を持つて、そのまゝ歸らうとしました。

伍陳の妻は、是非夫を再び蘇らせていただきたいと、涙を流して願つたが、易者はどうしても承知しなかつた。伍陳の妻が尙も額を地につけて頼むので、易者は、

『私の術は淺くて、とても死人を生き返らせることは出来ない。ついては一人の

男を教えてあげよう。その男なら或は出来るかも知れない。が、その代り、この男にいくらひごいめに會つても、じつと我慢してゐて決して怒つたりしては駄目だ。』と、いつて歸り去つてしまひました。

伍陳の妻は、易者から教えられた通り、西の門から家を出て、一直線に西を指して行つた。西の町へ行く途中、七人目に會ふ男が、起死回生の術を知つて、ゐるといふのでした。

まつ先に會つた男は、牛に乗つた子供、二番目にあつたのは、畑へ急ぐ百姓の男、次は——その次は——とうとう七人目の男に會つた。が、その男は、そばへも寄れないやうな汚い乞食でした。

『まさかこんな男が——？』と、伍陳の妻は思つたが、それでも七人目だつたので、その足許へ坐ると、易者からいはれた通り丁寧に頼んでみました。然し、その乞食は笑つてばかりゐて、中々返辭をしないのです。

四

その中に、次第次第に道ゆく人は足を停めて、二人の様子をじろじろと眺めておりました。それでも伍陳の妻が歸らうともしないので、男はとうとう怒つてしまいました。

『神様ぢやあるまいし、死んだ者が生き返らせられるものか——そんなつまらないことをいつてゐるひまがあつたら、これでも啖え！』

乞食男はさういひさま、道に吐いた青痰を杖のさきにつけて、伍陳の妻の鼻の先へつきつけました。

流石に伍陳の妻も暫くためらつたが、易者の言葉を思ひ出して、眼を瞑つてその痰をのみこんだ。それと見た乞食は、

『あはは……』と大聲に笑つてそのまゝ歩き出しました。

夫に死なれた悲しさと、乞食の男に馬鹿にされた口惜しさで、妻は夫の胸に取りすがつてわつと泣き出しました。

すると急に氣持が悪くなつて、あつと思ふひまもなく、鬼に喰ひ破られた夫の胸の中へ、血のかたまりを吐いてしまひました。

あまりのことに飽つけにとられた妻が、ぼんやり見てゐると、不思議なことに吐いた血のかたまりは、夫の胸の中で靜かに動いてゐました。

伍陳の妻はびつくりして、あはて、夫の胸の傷を合せ、しつかと抱きしめたがそれでも白い霧のやうなものは、傷の合せめからもやもやと出るので、急いで朱い絹糸で合せめを縫ひました。

さうこうしてゐるうちに、伍陳のからだはだんだんと温くなつたので、妻は苦しや——？と思つて、そつと蒲團をかけて置いた。

二時間程たつと、鼻からはすうすうと呼吸が漏れはじめ、五六時間たつと、手



や足の大きさがびくびくと動き出しました。
 妻は伍陳に今までのことを物語りましたが、伍陳は信じませんでした。妻は伍陳に胸の傷を示しました。それで夫は漸くに信じたのです。
 伍陳の胸の傷は、絹糸程の細い朱いあとになつて残つてゐたが、たいした痛みも感じられなかつたのです。そして間もなく、そのあとも消えてしまつたといふことでもあります。

李丘から李孝へ

支那の國の昔にあつた話でございます。
 或る片田舎に李丘と言ふ大へん孝行者が住んでゐました。或る時のことお母さんが、

「これ李丘や、今日はお天氣がよいからお寺に参りたいと思ふが……」
 と、申しますと李丘

「はい。さようなさいまし。私が背負つてさしあげます。」
 と、それから、李丘はお母さんを背負つて、お寺に参りました。

「途中で村の人がからかいます。」
 「や、これは李丘、今日は何ちらへ。」



「え、一寸お寺まで……」

「あゝ、さようか。私はまた母親を賣りに行くのかと思つた。」

「滅想もない。」

と、李丘は道を急ぎます。すると、また村の人が

「や、李丘、その背中の中のものは何らで賣るのだ。」

「滅想もない。賣物ぢやございませぬ。お寺へまひるのでございます。」

と、皆にからかはれても、矢張り母親を背負つてお寺へまひりました。

母親は一人本堂に通つてお祈りを始めました。その間李丘は一人で石段の下に

待つてゐるのであります。

今度、母親が出て來ると、何うしたことか李丘が泣いておられます。お母さん

は、

「李丘、お前人にからかわれるのがはづかしかつたら、私を背負はなくても好う

ござんすぞえ。」

と、申します。

「否え、勿體ない。そんなことで泣いてゐるではありません。早く負はれてく

ださいまし。」

と、母親を背負ひました。

「では、何故泣いてゐた。」

と、そこにお寺の長老が現はれて申します。

「はい。こうしてお母様を背負ひますのに以前より、大分經くなつてまひりまし

た。經くなつただけ、お母様の體が衰えて行くのでございます。それが悲しふて

泣きました。」

と、李丘は申しました。

「ほう、それは近頃殊勝な心掛けだ。」



李丘から李孝へ

一四八

と、滅多に人のことをほめたことのない長老様がおほめになりました。それから、暫くたつてからでございます。李丘はある少しの過ちから、母親に鞭で叩かれました。すると、李丘は涙をこぼして、さめざめと泣きだしました。丁度そこをその國の王様が通り合して、これを認めて、その傍に車を近づけさせました。

「お前は母親に叩かれるのが痛くて泣くのか。」

と、王様は李丘に問ひました。すると李丘は涙を拂つて、

「否え、さようではございません。」

と、頭をふります。

「では何うして泣くのだ。」

と、王様は再び語氣を強めて申しました。

「痛くないから泣くのでございます。」



と答えますと、

「何、痛くないから泣く……それは一體何う云ふ譯だ。」

と、王様は不思議がりました。

「さらばでございます。母様先年、私をお叩きくださる時は、もつと痛うございました。それに今叩かれて見ますと、あまり痛くございません。これは母様のお力が衰えたからでございます。私は、それが悲しくて、悲しくて……」と、また潜然と涙をたれました。

これを聞いてゐた王様は、ひどく感心して、

「お前は、全く孝行だ、自分の身の痛さも忘れ、母の力の衰へたのを歎くとは感心の至りだ」

と大そうお褒めになつて、ごほうびを澤山下さいました。それから李丘は王様から孝行だからと言ふので、李孝と言ふ名をもらひ御殿に勉める様になりました。

李丘から李孝へ

一四九

魔法のマント

昔支那の、杭州といふ所に、王鬼と云ふ人が居りました。

王鬼は、もう三十歳を越してゐるのですが、まだこれといつて、何も仕事を持つて居ない書生でありました。彼は、試験を受けて、お役人に成らうと思つてゐるのでした。そんなに飛びぬけて、賢いと云ふ程でもありませんでしたが、と云つて馬鹿ではなく、ごく人のいゝ男でありました。

成る時のことでした。王鬼は、白樂天といふ偉い詩人の著した詩集を読みながら池の畔りをブラ〜と歩いて居りました。池には蓮の葉が、一めん青々とし

て、水の面に、おほひかぶさつてゐました。岸には、楊柳が列をなして並んでゐるのでした。

彼は、さうした美しい景色をも、別に珍らしいとも思はない様に、一心に、本から目を離さないのでありました。ところがそこへ、どこからともなく、年老つた一人のおぢいさんが通りかゝりました。口髯は雪のやうに眞白くて、胸の邊りまで長く、美しくのびてゐるのでした。髪も、やつぱり眞白で、房々と耳をおほひかくす位に、のびてゐました。その目は、何だか賢さうで、そして優しいのでありました。この不思議な老人は、王鬼を見ると、につこり笑つて、その前に立ちまゐりました。

『もし〜、大變熱心に讀んでゐますね、あなたは試験を受けやうとしてゐるのですか。』

王鬼は、突然かけられた言葉に、一寸驚きました。

『はい、今まで三度も落第したので、今度こそは成功しやうと思つて、一生懸命に勉強して居るのです。』

『白樂天の詩集ですね。その詩をよく覚えてゐたら、きつと通るでせう。しかし試験といふものは、まあ運ですからね、いくら學問が出来ても、落第ばかりつけて、書生で一生を過すやうな氣の毒な人が、この支那には、随分澤山ありますよ。』

『ほんたうに運といふもの程、困つたものはありませんね。考へると何だか勉強するのもしやになります。』

『ほう、あなたもそこに氣が付きましたか。それでは私が面白いことを教へてあげませう苦心をして試験なんか受けるよりも、どんなにか痛快なものです。』

といつて不思議な老人は、懷の中へ手を入れて、ハンケチのやうなものを出しました。そして、それを擴げながら二三度振りますと見る／＼に大きなマント



になりました。

『おや！』と覺えず聲に出して、王鬼はびつくりしないではゐられませんでした。老人は言葉を改めていふのでした。

『そんなに驚くことはない。このマントは、實に不思議な力を持つてゐるのぢや。このマントを着てゐると、人の前で姿を消せるのぢや。誰の目にも、このマントを着た人を見ることは出来ない、なんと不思議な力を持つてゐるマントではないか。』

『おぢいさん、それはほんたうですか？』

『ほんたうだとも、そんなに疑ふなら、私がやつてみやうかね。』と言ふなり老人が、そのマントを着たかと思ふまもなく、その姿はふつ／＼と消えて仕舞ひました。

『おや／＼……』王鬼は呆氣にとられて、老人を探さうとして、四邊りをうろう



ろするのでありました。

するとやがて、

「解つたかね、解つたらもう姿を現はすよ。」

といふ聲がすると同時に、老人の姿は、彼の前に現はれました。その時は、マントをぬいで手に持つてゐるのでありました。

「ごうも變ですな。」

「ちつとも變なことはないよ。これがマントの不思議な力だ。さあ、お前さんにあげるからこれを持つて町へ行つて、いろんな面白いことをして御覽、試験の勉強なんかより、よつぽど面白いよ。はゝゝゝ」と云つたかと思ふと、老人の姿は消えてゐるのでした。

二

魔法のマントを貰つた王鬼は、嬉しくてゝたまりませんでした。

「こんな珍らしい物を持つて居る者は、世界で、自分よりほかにはないだらう。今まで自分は試験に通ることが何よりの望みであり、喜びであつたが、このマントを貰つた喜びなんかには、遠くゝ及ばないことだ。自分はなんと云ふ、合せ者だらう。」

王鬼は、全く有頂天になつてゐました。そして、この不思議なマントの機能を現はして人々をあつといはせてやらうと思ひました。

「さうだ、旅に出やう。このマントを持つてゐさへしたら、どんな面白い事でも出来るのだ！」かう決心した彼は、書物を捨て、旅の人となりました。

日本と違つて、支那には、それはゝ大きな川があります。まるで海のやうで岸に立つてゐる、向ふの岸が見えない位に川幅が廣く、大きな舟が幾百隻となく走つてゐるのです。王鬼は舟に乗つて、三日三晩、川下から川上にむかつて揺ら

れて行きました。そして、或る大きな町につきました。

その町では、ちやうど今日はお祭りで、それはく賑やかでした、わけても、お芝居の演じられてゐるところは、身動きもならない位に、人で一ぱいでした。

『支那第一の俳優が来て居る相だ。入つて見たいなあ。しかし、木戸銭がすい分に高い。』

といひながら人々は、入口でためらつてゐるのでした。日本のお金にして、入場料が實に、大人が十圓で、子供が五圓といふ素晴らしい高價なので、入りたくても入れないのです。

『もつと安かつたらなあ。いかにも残念ぢやと云つて、口に指をくはへてゐる人もありました。この時、さうしたためらつてゐる人の後から、快よい笑を頬に浮べ乍ら、劇場の入口に近づいて行く男がありました。』

『十圓の入場料はちと高い。然し、自分だけは木戸御免だ。大威張りで只で見

やらう。』

と口の中でいひ乍ら、スボリとマントをかぶると、不思議にもその姿は見えなくなりました。そして、人々にさとられないで、すうと入口から中へ入つて行きました。申す迄もなくこの男は王鬼であります。

『うまいことをした。面白い芝居を只で見つた。これもマントのお蔭だ。』やがて王鬼は、劇場から出て来て、すぼりとマントを脱いだのでした。

『さあ、今度はなにをしてやらう。お腹がすいたから、何か食べ物を拜借しよう。』といふなり彼は、焼鳥屋の中へ入つて、焼きたてのつぐみの美味しいのを、ごつさり拜借して、舌鼓を打つて食べました。

『棗がほしくなつた。』といふなり彼は果實屋の店先きに並べてある赤く熟した棗を五つばかり、そつと持ち出しました。

『あゝ、これでお腹も太くなつた。少し町を散歩しよう。しかし、てく〜歩く

のは嫌だ』と云つてゐるところへ、立派な二頭だての馬車が、向ふから走つて來ました。

『おや、王様のお馬車だ。お姫様も乗つていらつしやる。しかし、かまやしない。このマントさへありや大丈夫だ。』

いつしか彼は、王様と肩を並べ、お姫様と向ひ合せに、馬車に乗つてゐました。王様やお姫様からは、少しも彼の姿が見えないものですから、王様は、大きな口をあいてあくびをしたり、鼻をかんだりなさいます。お姫様もやつぱり、あくびをしたり、顔のお化粧を氣にして、鏡を出してしきりに見ていらつしやいます。王鬼は、とても誰でも見る事の出來ない、高貴の方々のさうしたお振舞を穴のあく程見ることが出來るのでした。

『お姫様のあくび……』

王鬼はおかしくて、今にもウフ、と笑ひ出しさうになるのでしたが、

聲を出しては大變ですから、我慢して笑ひをかみしめてゐなければなりません。した。

やがてお馬車は、御殿につきました。

『おや、變な所へ來たぞ。まあいゝや。一生の思ひ出に美しい御殿の中を拜見しよう。』

かう考へた彼は、王様やお姫様より一足おさきに失禮して、馬車から降りると御殿の中へ入つて行きました。ごのお部屋も、美しく立派でありました。王鬼はまるで、夢の中の人のやうに、それを眺めることが出來ました。そしてその夜は、おそれおほくも御殿の中で、一夜を明しました。そして、朝御飯は、ちやんと王様の爲に準備のしてあるお料理を、平氣でお先きに失禮して、雲を霞と、御殿を出て行きました。

王鬼は、すつかり有頂天でありました。

不思議なマントが、こんなにくまなく役立たうとは、彼自身さへ思はなかつたのでした。

『自分は、なんと幸福な男であらう。たとへあの時勉強して、試験に成功しても王様と一緒に馬車に乗つたりするやうな、偉い人にはなれないにきまつてゐる。なほ、王様の召し上る御馳走まで食べるなんてことは、夢にだつて見られないのだ。お、何といふ仕合せ者だらう！ それにしても、一たいあの老人は、何者だらう。なぜ自分に、あんな上等なマントを呉れたのだらう！』

かう考へ乍ら王鬼は、町に出て、また悪いことをはじめました。呉服屋に入つて、目の覚めるやうな美しい反物を持ち出したり、お菓子屋に入つてお菓子を、

陶器屋に入つて、青磁の花瓶を黙つて失敬したりして、したいと思ふ事をし、ほしいと思ふものを、黙つて自分のものにしてました。不思議なマントを利用して、人間の力で出来るだけの悪い事をしたのでした。ところが、その日の夕方のことでありました。さんくゝ悪いことをした王鬼は、すつかり疲れてゐました。

『あしたは、もつとくゝいたづらをしてやるぞ。然し、こんなに疲れてゐては仕方がないお湯にでも入つて来やう。』といつて彼は、お湯屋に行きました。彼のことですから、勿論お湯銭などは拂はないで、マントを冠つて姿を消し、うまく入口の番人の目をかすめて、中へ入りました。そして、マントを脱いで裸になつて、湯槽に身を浸しました。

『あゝいゝ氣持だ。もうかうして中に入つたら、姿は見えてもかまはない。湯槽から上つたら、またマントを着て外へ出るんだ。』

と心の中で思つてゐるのであります。やがて彼は湯槽を出て、體を拭き、着

物を着ました。そして、マントを着ようとしてみると、ありません。

『おや、たしかにここに置いたのだが、一たいどうしたんだらう。大變なことになる。』

と彼は眞青になつて、マントを探しましたけれども、どうしても見つかりません。

『どうしよう／＼、ここでマントがなくなつたら、もう自分の身は破滅だ。どうしても探し出さなければならぬ。』

彼は、全く氣も狂はんばかりになつて、目を白黒させながら、探すのでした。

とこの時『王鬼、うろたへるな！』といふ聲がしたので、驚いて振り返つて見ますと、そこには老人が立つたおりました。その老人こそは、まさしく先達で、あの海のほとりでお出會つた。長い白毛の口髭の老人であります。老人の手には、魔法のマントが、抱へられておりました。

『お、あなたが持つてゐて下さつたんですか。それで安心致しました。どうかお返し下さい。』

と彼は頼みました。然し、老人の顔は、みる／＼うちに恐い表情に變つて、

『いやならぬ。このマントは、そんな悪いことに使ふ爲に與えたのではない。お

前が、餘り一生懸命で勉強してゐるので、一寸慰めのために、貸したのぢや、お

前は、思つたよりずるい人間である。そんな奴には、もう貸すことは出来んから

さう思へ。』

といふ言葉が終ると同時に、老人の姿と、マントはいつしか消えておりました。

『あ、私は悪かつた。許して下さい／＼。これからは、あんな悪い事には使ひません。子供達とかくれん坊をする時に使ひますからどうか返して下さい。』

といひ乍ら、お湯屋の中をかけ廻つて、老人の姿を探したのでした。しかし、老人の姿の代りに、彼の前には、お湯屋の番人が飛んで來ました。



『やい、泥棒！ 覺悟しろつ！』

といつて、王鬼の襟首をつかんで、往來に引ずり出しました。そして、お巡りさんの處へ連れて行くと、すつかり今迄の悪いことが解つて仕舞ひました。重寶な、面白い、魔法のマントの爲に彼は、身を滅すことになつたのであります。



占ひの名人

支那に張華といふ人があつて、大そう占ひがうまく、死刑ときまつた罪人は一たん家へ歸つて暇乞ひをして來ることを許しましたそれと云ふのがもし途中から心が變つて、そのまゝ逃げ出してしまつても、張華は自分の得意の占ひで調べて屹度その囚人の逃げて行つたところを探し當てるから、誰もしまひまで逃げ負はせきれないのです。そこで死刑になる囚人を、ドン／＼家に歸して、用がすんだら何日までに歸つて來いと云ひつけてやるのでした。

所が一人の囚人が、いよ／＼死刑にされる前に、自分の家へ歸されましたが、お父さんもお母さんもモウ年を取つてゐて何時死ぬか分りません。その時になつて世話をする者もないといふ始末ですから、何かして監獄に歸らずに、親に仕へ



てゐたいと思ひました。しかし前云つたやうな占ひの名人ですから逃げ隠れしたところで、屹度探し出されて殺されてしまふにきまつて居ます。そこで譯を話して、ある人に相談すると、その人が、

『では、砂原へ行つて、腹の上へ水の一杯入つた竹筒をのせて、仰向に寝てゐれば好い。』

と教へて呉れました。で、その通りにしますと、張華の方では何處へ逃げたかと占つて見た所、砂に背中がついてゐて、腹の上に水が三尺も積つてゐると分りましたから、『あゝ、この男は川へ入つて死んだと見えるモウ探さなくても好い。』と云つて探させることを止めました。

幾日か立つて、その囚人は兩親と一しよに暮らすことが出来るやうになりました。そこでこの事を教へて呉れた人に會つて、厚く禮をしようと思ひましたが、その教へて呉れた人は、何にも受け取らずに、何處へか行つてしまつたさうです。



幻術使ひの仇討

一、蓮英の身の上

昔、支那の南京から十里ほど離れた黒聳山といふ山の麓に山育ちとは思はれぬほど上品な母子二人の者が隠れ住んで居りました。

母親の名を暉春といひ、息子の名を蓮英と言ひました。――蓮英が十四になつた春の、或る日の夕餉を終えた時のことでした。

『これ、蓮英、お前にちよつと聞かせたいことがあります。』
何か思はしげな容子で、蓮英の顔をしげしげと見てゐた母親の暉春は、さう改まつて口を切りました。

「ハイ、お母さん何です？」

稗史を擧げました蓮英は、本を下に置いて顔を擡げました。

「蓮英、お前も最早十四、辨へのつく年頃におなり故言つて聞かせますが、必ず驚いてはなりませんぞ。いや、驚くのも無理はないが決して徒らに悲しんだりしてはなりませんぞそれより自分の身の大きな務めの被つてゐるのも知つて、心を強う持たなくてはなりませんぞ」

嚴かな口吻で幾度かさう戒める様に言つて母親の聲は早くも涙に曇りかけました。たゞならぬ母親の容子を見て蓮英は胸を騒し乍ら追ひかける様にして言ました。

「ハイ、ごうぞ、早く聞かせて下さい」

「實は蓮英、お前の父さんといふ人は……」

と、言ひかけて思はず聲を途切らすと、語るより先立つ涙を袂で拭ふのでした。

やがて、母親が涙乍らに物語つたところは斯うなのでした——。

蓮英の父親といふのは元蘇州の宰領で、陳顔淵といふ人なのでした。陳侯は大層思ひやりの深い殿様でしたので、住民達も大へん陳侯を慕つて、その領内はいつも春の様に平和に治つてゐたのでした。すると、蓮英の生れたその年にひよつくりと一人の若い豫言者が陳侯を訪れて「殿様、今度お生れ遊ばしたお子様が育ちますと、必ず後になつて殿様の身の上に危害が加はる様なことが起ります。どうぞ今の内に始末をおつけ遊ばせ」と、真しやかに恐ろしい豫言を申し上げました。雖も初めて生れた可愛い子供をどうしてそんな可哀想な目に逢はすことが出来ませう。勿論、陳侯は豫言者の言葉を信じませんでしたでしたが、それと見て豫言者がいろく不思議な術を演て見せたり。豫言をして當て、見せたりすると陳侯も段々薄氣味悪く思ひました。そして遂に陳侯は惡魔に魅いられてしまひました。妻の暉春が泣いて頼むのも肯き容れず、豫言者の言葉通り生れた許りの幼い蓮英は、



狼おほからの住むといふ黒簷山こくしようざんの山奥やまおくに捨てられてしまひました。雖も母親は、可愛い蓮英れんえいをどうしても狼おほからの腹はらに葬はなむるに忍しのびず、密ひそかに腹心はらこゝろの家臣けらいに言いひ含かくめて、蓮英れんえいを黒簷山こくしようざんのとある獵師れつしの家いえへ預あづかりさせたのでした。この事こと以來いらいその豫言者よげんしや鐘かね享かうといふ男おとこは益々ますます陳侯ちんこうに取入とりいりて寵ちゆうを一身しんに聚あつめる様やうになりました。鐘享かねかうが次第しだいに權威けんいを振ふるふに従したがつて施政しせいは緩ゆるみ、住民ぢゆうみん達は苛税かせいに苦くるしめられる様やうになりました。すると、二年にんねん目の夏なつに思おもひがげなく陳侯ちんこうは眠ねむるが如ごとくに歿たぐつてしまひました。侍じ醫いも頓死とんしと診斷しんだんし世間せけんにもさう發表はつぱうされたが、暉春きしゆんだけはそれを信しんじませんでした。凡すべては鐘享かねかうといふ惡魔あくまの仕業しわざに違ちがひないと思おもひました。そして、密ひそかに邸やしきを脱だげ出して、可愛あいい蓮英れんえいの預あづかりてある黒簷山こくしようざんの獵師れつしの家いえへ走はしつたのでした。それには早はや三歳さいになつた蓮英れんえいが恙つがなく育そだてられてゐました。暉春きしゆんは犇ひくわが子こを抱だきしめて熱あつい涙なみだにくれました。それからといふもの、母親ははの暉春きしゆんは、一日いちにちとして亡夫ぼうふの腹はらを胸むねに描かかぬ日ひとてなく、蓮英れんえいの成長せいちゆうを待まちつて、早はやくも十二年にんねんを過すごしたのでした。

二、幻術修業

蓮英れんえいは初めて知しつた自分じぶんの身みの上うへの數奇たぐな運命うんめいに驚おどろかすにはゐられませんでした。と同時に一方かたならぬ母ははの恩愛おんあいを犇ひくわ々と胸むねに感かんじました。顔かほも覺おぼえぬ父親ちちの無む念ねんさが思おもひやられました。蓮英れんえいは吾われを忘れて母親ははの膝ひざに泣なき崩くづれましたが、母親はははキツとした容よう子すで、蓮英れんえいの肩かたに手てをかけて起おこすと、『コレ、蓮英れんえい、その嘆なげきも無理むりはないが先刻さつきも言いつた様に今いまは徒いたづらに悲かなしんではなりません、口惜くちやくしさを堪こらえてこの年月としつきまでお前まへを育そだて、來きた妾めかけの心こゝろを汲くんでどうぞ健氣けんきな心こゝろを持もつて下ください。雖けれも、決けつして焦あせつてはなりませんぞ、對手あひては何なにしろ妖あやしの術じゆつに長たけた曲者くせもの、迂濶うかつには近ちかづけませぬぞ。よう考かんがへを廻めぐらした上うへで見事ご仇あだを討うつて下ください』



と諒々と訓すのでした。

蓮英も自分の肩にかゝつた重い務めを知ると、再び母親に涙を見せませんでした。そして、いろ／＼と心を碎いた末、その頃、支那で名高い幻術使ひの奇人が黒聳山より更に山深く入つた雲蟠山の山奥に住んでゐるといふことを聞いてゐましたので、その奇人から幻術を授かれば、如何に鐘享が妖術に長けてゐようと討取ることは容易だらう、と思つて、このことを母親に話しますと、母親も喜んで賛成しましたので、早速蓮英は千古斧鉞を加えたことのない様な晝なほ暗い山へ分け入つた幻術使ひの奇人を訪ねました。その奇人は名を柳杜烟人と呼びました。烟人は誰が訪ねて来ても奇術の傳授は堅く断りましたので、蓮英の頼みも一應は断りましたが、蓮英が詳しい事情を述べて熱心に頼み込むと、その孝心に動かされたものと見えて遂に幻術の傳授を許しました。それからといふものは蓮英は烟人の門人となつて、夜の目も眠らぬほどに熱心に勵みました。烟人も熱心に



教えましたので、三年ほど経つと、隱身の術、分身の術、無形の術、其他奇術三十六秘術を一通り覚え込むことが出来ました。

『これ／＼蓮英、其方はもう大方幻術を覚えつくした様であるから、今日は幻術虎の巻とも謂ふ可き烟操の秘術を授けて遣はすと致さう』

今日しも烟人は蓮英を招いでさう言ひました。

『ハイ、ごうぞ、お願い致します』

いよ／＼幻術の奥儀を極めることが出来るといふので蓮英の顔には喜びが溢れてゐます。

『然らばよいか、』さう言つて烟人は立上ると一本の線香に火を點じて其處へ立てると、傍らに眼を閉ぢて立ちました。

『よいか、先づ斯うして虚無放心の心状になるのぢや、次第に五感か澄んで體が虚空になつて參る心地が致す、この氣持の極まつた時に解説の呪文を十唱するの



ちや、よいか、至透登仙投體偷讀、々々々々々々……、ソレ、もう俺の姿が其方には見えまい、雖も俺はチャント線香の烟の上に乗つて居るのちや』

成程、聲はするけれども烟人の姿は見えませんが、たゞ、線香の烟が、うね〜と彼方此方へ靡くばかりです。この不可思議極る術には蓮英はたゞ〜驚くばかりでした。暫らくすると、烟人の姿は再び描き出す様に朦朧と現れて、ピヨイ烟の上から飛降りて蓮英の前に立つと、

『さあ、今度は其方試して見い』と申した。

『ハイ』

蓮英は早速今見た通りの構えをして、線香の傍へ立つて呪文を唱えました。

『いや、もつと虚心にならなくては不可ん眼に何も見えず耳に何も聴へずといふ様にならなくては不可ん』

さう言つて烟人は傍から注意をしました。蓮英は二度許りやり直してなほも熱



心に續けました。三度目にやつと心が恍惚として體が軽くなりましたので、ピヨイと線香の烟の上にとび乗ると、不思議にも體は落ちもせず、烟の上へ支へられるのでした。その上、心の思のまゝの方へ烟が自由に靡くので遂面白さに誘はれて彼方此数へと烟を操つてゐましたが、烟人がそれを見てニコ〜と笑ひ乍ら、

『うん、見事々々、もう宜い、さあ降りろ』と聲を掛けたので、再び呪文を唱えて元の姿に返つて烟の上から飛降りました。

『これ蓮英、最早この上は教ゆる可き事もない、さあ、一時も早く山を下つて其方の仇と目差す者を討取つたがよい』

烟人は吾がことの様に喜んでさう申しました。蓮英は幾度か厚く禮を述べて、三年の間といふもの親の様に思つて仕えた、懐かしい柳杜烟人の許を去つて山を下りました。



三、幻術妖術の秘術競べ

数日の後、蓮英の姿は鐘享の領下なる蘇州に現はれました。蓮英の父が宰領であつた頃は蘇州の城下は繁華を極めてゐたが、鐘享が宰領となつてからは悉皆萎靡してしまつたといふ話でしたが、昔の事を知らない山育ちの蓮英の眼には何を見ても眼を瞠らすにはゐられないのでした。蓮英は昔の事を想ひ乍ら今更仇敵鐘享に對する憎しみの血を湧きたゞせました。

鐘享の邸は驚くほど立派で、邸の周圍には濠を掘りめぐらせ處々に番兵が立つてゐて中々警戒も嚴しいのでした。しかし、幻術の達人である蓮英にとつてはその中へ忍び込む位のことには譯のないことでした。蓮英は先づ無形の術に依つて、自分の姿を人に見えない様にしてしまつてから、ツカ／＼と門の方へ近附いて行きました。そして、番兵達に向つて、

『オイ、コラ、一寸門を開けい！』

と申しました。番兵達は吃驚して四邊を見廻したが何の姿も見えないので『オヤ、今の聲は何か、貴様が言つたのか』イヤ俺ぢやない』ウン、此奴は可笑しい、狐の仕業かな』等と言ひ合つてゐます。蓮英は可笑しさを堪えて更に『オイ、早く開けんか、開けん片つ端しから掴み殺してしまふぞ』と嚇しつけました。すると番兵達は『ウンこれは狐狸の仕業に相違ひない、ソレ、追拂つて了へ』と言つて劍を抜き放つて滅茶苦茶に振廻しましたが素より姿の見えない蓮英をどうして斬付けることが出来ませう。その間に蓮英は一人の番兵の襟首を掴むとポンと濠の中へ投げ込み、更に一人の劍を掻き取つて返す刀で首をコロリと落してしまひました。この體を見て他の番兵達はワツと聲を擧げて奥へ逃げ込んでしまひました。蓮英は悠々と門を開いて中へ入りました。すると、既に番兵共が訴へたものと見えて、大勢の軍兵が彼方から雪崩を打つて押し寄せてくるのした。それと

見た蓮英は『ウム、小癩な』と呟くと何か呪文を唱えましたが、不思議！蓮英の周囲からは雲霞の様に夥しい軍卒の姿が現はれて、真霧に敵兵目覘けて突進し初めたのです。と、敵兵は大狼敗、忽ち蜘蛛の子を散らす様に逃げ初めましたが、追はれ〜れて何も濠の中へ落込んでしまひました。すると、この有様を遙か本城の方から見はつてゐた鐘享は『え、ッ、何奴なるか、狼籍者奴、この鐘享が見ん事討取つて呉れん』と言つて大いに怒り直ちに家臣に命じて馬を曳かせると、ヒラリと乗つて駛り出しましたが、何處へ消えたのか、蓮英の姿は形も影もないのでした。それも、その筈、その時には蓮英は疾うに姿を變へた、鐘享の乗つてゐる馬に化けてゐたのです、鐘享はそれとは氣が付かないので、『え、ッ、曲者、何處へ逃げた、姿を現はせ〜』と四邊を見廻して口惜しさうに聲を立てると、之は又不思議、鐘享を乗せた馬が急に暴れ出して空高く馳け上り初めたのです。鐘享は吃驚仰天！落ちては一大事と確りと馬の首に抱き

付いてゐます、すると鐘享ののつてゐる馬は『わが父の仇鐘享、さあ覺悟致せ』と人間の様に言つて一揺りして鐘享を振り落してしまひました。アツと言ふ間もなく鐘享は眞倒様！地上へ落ちて死んでしまふかと思つたら流石は妖術使ひのことゝて、途中で蝶に變身してヒラ〜と舞ひ落ちてゆくのでした。之を見た蓮英は己れ逃してなるものかと、之又ヒラリト雀に變身して蝶を追ひ駆けました。是から蓮英と鐘享が幻術と妖術の秘術を盡して一騎打ちをするといふ面白い話になるのですが、餘り長くなるので省くとして、最後に鐘享は本城へ逃げ込んで、散呪の香といふ香を焚いて蓮英を退散せしめようとしたが、却つて蓮英の烟操の術の爲めに利用されて遂に討果され、蓮英は芽出度く亡き父の仇を取つたといふことです。

幽霊塔の秘密

(一)

時は春の半ばで、それは支那のある町のことでありました。家口には牡丹の花が繪料をこつてり盛り上げたやうに咲き亂れ、白い卵の花が垣根に添うて揺れてゐるのも、何となく支那らしい、そして季節めいた風情がありました。

それにゴチャ／＼として、穢い支那街ではありましたが、強い煙草の匂ひや、黄酒の匂ひやがムツとする程立こめてゐるし、凸凹な石疊の街の路には、牛の脂や豚の血が流れてゐて、それが赤い夕陽に照らされてゐるのが何となく薄氣味悪

く感じさせられるのでした。

寶石商の息子の李王英さんは、もう餘程前から窓に凭れて、茫乎と、どこかかう夢見るやうな面持で外を眺めておりまゝでした。

「オヤツ——」
と王英さんは吃驚して了ひました。——昨日も一昨日も、去年も一昨年も、いやつひ今の今し方まで、この窓から見えてゐた廣い空地が、急に消えて無くなつてゐるのである。そうしてその代りに一つの大きな塔が、ニユウとして空に聳えてゐる。——と、ま、かういふ譯なのでありました。

「アツ……アツ……。これは不思議だツ。」
と王英さんは思はず聲を立て、了ひました。

「これは不思議だ。昨日僕が見た時には確に彼方はまだ廣い空地だつた。そうし

て僕は考へてゐたんだ。彼方へ行つて、お隣の麗さんや向ひの鳳さんたちと、球投げをして遊んだら、怎んなに面白いか知れないと——それなのに、怎うしたんだらう？ 誰か、どうして一晩のうちに、あんな巨きな塔なんか建て、了つたんだらう？』

全く李王英さんは驚いて了ひました。そしてこの氣味の悪い出来事を、どう何と考へたらいいのか、あんなりの不思議さに譯が分らなくなつて了ひました。

ところがこの不思議な事が、又もや續いて不思議な事を惹起したではありませんか。——李さんは又々、悸！ としてびびく吃驚りして了つたのです。

それから一分か二分、間もなくの事でありました。

李さんがその不思議な巨きな塔を眺めておりますと、何處へ行つた歸りなのか、隣の麗さんが一人で紅のやうに美しく着飾つて、眼の醒めるばかりに輝き、一人の侍女と一緒に此方へ靜かに歩いて來ました。すると、ふと立ち止まつて、や

つぱり不思議そうにそこに立つてゐる巨きな塔を見上げました。それから後を振り返つて、二言三言何か侍女に對つて囁きました。

『まア怎したんでせう？』

まア多分かう言つて驚いたのでせう。そして其儘すぐに麗さんは其處を通過ぎやうとしたのです。

と、その途端でした。——麗さんは急に劇しく身悶えしはじめました。——不思議な塔の中から、何物か見えぬ手で強く引き寄せてゐるかのやうに——すると麗さんはやがてスーツと塔の扉口のところへ走つて行きました。

と、ギ、ツと扉が自然に開きました。と思ふと麗さんと侍女はスーツと塔の中に吸ひ込まれるやうに這入つて了ひました。

再び扉はギ、ツと閉りました。——後は何事もなかつたやうに靜まつて、赤い血のやうな夕陽が、塔の半をカツと照らしております。

『?.....?.....?.....』
 あまりの不可思議さに、李さんは聲も立てる事が出来ません。
 小首を傾け、夢見るやうに、ホッと溜息でありました。——思案に餘つた溜息
 でありました。

(二)

その翌日の事でした。

李王英さんはやつぱり窓に凭れて、目の前の塔を眺めておりました。塔は、依然として昨日と何の變りなく、巍然と空に聳え立つてゐるのでした。

——が、この時初めて李さんは氣が付きました。

何といふ奇妙な型の塔でせう。——窓といふものがどこにもありません。入口の扉は鋼鐵で、卵のやうな形をなし、恐しく頑丈なやうな黒い錠前がついており

ます。屋根は槍のやうに尖つた塔を作つて空高く消えてなくなり、どう見ても大變古風な形の塔でありました。

その時、一人の西洋の女が、紅い日傘をさし翳して、彼方の方から活潑に往來を歩いて來ました。そして、恰度塔の前まで來ると、その西洋の女はふと足を止めました。

『何て怪しな建物だらう?』

と、やつぱりその婦人もこんなやうに呟いたらしく、ちよつと唇のあたりを動して見上げておりましたが、又すぐに歩き出しました。

と、突然! 再もや昨日と同じやうな不思議な光景が、忽ち其處に起つたではありませんか?!!?!?!?!

西洋の女は劇しく體を捻じ曲げました。と思ふと塔の中から何物か巨きい手で引き寄せてでもゐるやうに、スーツと扉口の方へ引きつけられると、卵形の鐵

の扉がギョツと開いて、スーツとその女は吸ひ込まれてしまつたのです。

奇怪な塔は、かうして李さんの目の前で、二人の女の人を呑んで了つたのです。

『アツ、アツ、アツ？……』

と李さんは再び悸！として了ひました。

とは言へ、やがてこの時、李さんの心の中には、もう一つの考へが湧き上がつて來たのでした。

『自分も這入つて見たい。』

とかういふ氣持でした。

『自分も這入つて見やうかしら、何があのの中にあるのだらう？ とにかくお友達
の麗さんもゐる——。』

かう考へながら、李さんは翌日も翌々日も窓際に傍りかゝつて不思議な塔ばかりを眺めておりました。

(三)

その頃からのことでした。

この支那の市街には、得體の分らない理由で、美しい少女や少年が、一人二人と行衛が判らなくなるといふ噂がバツと廣まりました。

しかし、その噂は李少年の耳には少しも這入りませんでした。なぜといふに、明けても昏れても李さんは、窓邊に傍つて茫乎と夢見るやうに、塔ばかりを眺めてゐてちつとも外へは出なかつたからです。

その日も彼は窓邊に傍つて、夢見るやうに塔を眺めておりました。そうして心の裡に考へました。

『今日まで女の子が二十人ばかりあの中へ這入つて行つた。さうして一人も出て來ない。屹度何かすばらしく面白い事が、あの中にあるのかも知れない僕も這入』